
拳闘 ～汗と努力の果て

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拳闘 ～汗と努力の果て

【Nコード】

N2111H

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

十七歳で高校を中退してしまった京本勇也は、テレビでボクシングの世界戦を見て、プロを目指す事を決意した。辛い練習を続け、周りに認められていくうちに、やがて戦う事の意味を知ってゆく…。

プロローグ 明日は……

京本勇也は、ぐつと体を起こして、部屋の壁にかけてある×印だらけのカレンダーをまた見た。いよいよ、明日プロテストなんだ。そう思う度に、胃が締めつけられ縮こまるようだ。今日だけで何回見ただろう。二週間前から一日ずつマジックで消していった。三日ほど前からトレーニング禁止を言い渡されているので、エネルギーだけは有り余っている。明日のために散髪に行ってきた、綺麗に刈り上げられた頭をなでる。明日の準備をしてあるバッグからそつとボクシンググローブを取り出す。明日は頼むぜ。そう思うと体が熱くなってくる。

少し外を歩いてくるぐらいなら。

そう思つて、勇也は母の観月に声をかけ、2DKのマンションを出て、月の無い暗い夜道を歩いた。緊張なんかしたことないのにな、と心臓を押さえる。本当に動機が激しいのが手の感触でわかって、苦笑いする。俺は怖いものなんかねえ、誰にも、何にも負けねえ、そうやってイキがつて生きてきた。なのに……。

思った以上にまだ寒い。薄着で出てくるんじゃないかと、と足早に家に戻る。そして、ビデオデッキに電源を入れ、ずっと共英ジムから借りっぱなしの、もう何回見たかもわからない、WBCライト級チャンピオンの辰山譲の試合をまた見た。世界タイトル初挑戦のこのジムの偉大なる大先輩は、試合開始前から体中から気合を発散させて、対戦相手の現チャンプを睨みつけている。ゴングが鳴り響き、第1Rが始まった。軽快なフットワークから、いきなり飛び込んで左右のフックを見舞う。とにかく動きが早く、手数も多く、また、相手のジャブやストレートを巧みにスウエーやダッキングでかわす。何度見ても惚れ惚れとする。息も吐かせぬまま試合は第7Rまで来た。プロの世界戦は、最長12Rまであるし、実にしばしば最終ラウンドまでもつれ込む。だが、この試合はこのラウンドで終

わる。辰山のしゃがんでからのフックが相手のあごに入り、チャンピオンは大きくぐらつく。そこから右、左、右、アッパー、ついにチャンピオンはマットに倒れこむ。それを見てレフェリーは即座に試合を止めた。勇也は思わず拳を硬く握りしめる。何度見ても凄い体中が熱くなつて、両手を上げたくなる。新チャンピオン辰山は試合後インタビューで涙を浮かべながらこう言う。

「ボクがね、世界チャンピオンになれたのはね、ホントただの町のチンピラやった、ゴミクズだったボクを黙って支えてくれたお父ちゃん、お母ちゃん、共英ジムの白井会長、ジムの楽しい仲間、友達、他にも周りのみんなのおかげです。本当にありがとう！やったぜ、世界獲ったぞ！」

勇也がボクシングジムの門を叩こうと決意したのは、この辰山の三度目の世界防衛戦を見た翌日の事だった。

第一話 入門

「オレらも世界チャンピオンになりたいんスよ」

勇也がツレの君原邦治と共英ジムに赴いたのは、辰山が世界チャンプの三度目の防衛に成功した翌日の昼の二時頃だった。ジムの周りには、昨日防衛に成功した世界チャンピオンを一目見ようという人で溢れかえっていた。無論、激闘を終えたばかりの辰山はいない。その人だかりをかき分けて、髪の毛の勇也と、スキンヘッドの邦治が派手な色のジャージ上下でジムに上がりこんで、出迎えた真面目なサラリーマン風のメガネをかけたトレーナーのような人にボソボソと言ったものだ。統括トレーナーである小磯^{よしみち}義道はまた来たな、と言わんばかりに微笑んで、

「入会は大歓迎だよ。ただし、ウチは厳しいぞ。最初はロードワークや筋トレばかりになるけど、覚悟は出来てるか？」

「大丈夫スよ」

「よし、じゃあ説明するから、奥の部屋で少し待っててくれ」

そう言われてジムの奥の小部屋に入る。今も何十人と言うボクサーが練習をしている。汗と熱気が凄い。ミットを激しく叩く音が響き、リング上では多くの人がシャドーボクシング、つまり仮想敵相手に体を動かしている。

「おらあ！ 後一分頑張れ！」

壁のところでは、逆立ちをして、頭の下にタオルをひいて、必死に首を鍛えている人がいる。うお、あれはしんどそうだな、と勇也は思った。案内された小部屋には、長テーブルと、パイプ椅子が十個程度並べられていて、すでに全部誰かが座ってしまっている。見れば、どいつもこいつも勇也らと似たような雰囲気ของทีมーやチンピラのような奴らばかり。一番前の席の一人が、威嚇するように勇也を睨みつけてきた。茶髪をジェルで後ろに固め、黒のタンクトップにシルバーアクセを幾つも胸にひけらかしている。

「……あ？ 何だお前」

何か考えるより先に口が開いた。相手に顔をゆっくり顔を近づけ、絶対に目を逸らさない。

「汚ねえツラ近づけんなよ？」

相手が立ち上がり、勇也の胸を掴んできた。これで切れないわけがない。

「なんだあコラアあ！」

勇也は勢いよく相手の胸を押し、掴まれた手を跳ね除け、体勢を崩した相手を右の拳で殴ろうとした。そこへ、

「何やってんだ！」

とさっきのサラリーマン風のトレーナーが走ってきて、勇也の体に抱きついた。

「喧嘩はするな！そんな奴はウチにはいらんぞ！」

他にも数人ジムの人間が入ってきて、ともかく場は収まった。まだ勇也は茶髪オールバックが許せない。

「てめえあ、覚えてさらせよ」

と言つて、後ろに回った。邦治もだいぶ興奮している。わざと一列目の机の脚を蹴ってから後ろへ行き、立って説明を聞く。部屋の中は殺伐としている。

小磯トレーナーは、何事もなかったかのように、淡々と入会金や、練習のために準備するものや、今後目指す方向を決めておくようになどと話し続ける。椅子もなく立って説明を聞いている二人はイライラしてきた。が、話は長くはなく、入会用紙を渡されて、それで終わった。小磯は、順番を待つてふてくされていた勇也に紙を渡しながら聞いた。

「君は何歳だ」

「十七歳ス」

「スポーツの経験は？」

「……ガキの頃は野球もサッカーもしてた」

「ふ、いいだろう。だがな、最初に一個だけ言っとく。喧嘩したい

んならな」

グツと拳を勇也の胸に突き出した。

「リングの上でやれ」

「は、はい」

なぜか自然と敬語を使っていた。小磯トレーナーはまた微笑んで、邦治にも紙を渡し、ジムへ戻っていった。

二人は、見るでもなくジムの外から練習風景を見ていた。二人は中学からの友達で、同じ高校を揃って暴力沙汰で中退し、今は建築現場のアルバイトをしているが、それも行ったりは行かなかったりで、完全に宙ぶらりん、生きる目的を見失っていた。二人はなんとなく帰りそびれて、ジムの外の窓から、練習風景を眺めていた。

「あそこの奴、連打がすごいな」

「プロなんじゃないの。顔つきが違っわ」

「俺らも、早く試合がしたいな」

「どいつもこいつも殴り倒してやるぜ！」

言いながら邦治が突如どこかへ駆け出した。勇也もそれに続いた。そんな二人の後ろ姿を不思議そうに眺める一人の女性がいた。午後
の太陽は空に大きく燃え、若者達の心を大きく躍動させるのだった。

第二話 衝撃

「チャース……」

勇也と邦治は、翌日の昼の一時に共英ジムへやってきた。小磯を見つけ、用意してきた書類を手渡す。服装はトレーナーに軍パンと言うような、出来るだけ地味な格好を選んで来た。ド派手なジャージ上下はさすがに浮いていた、と感じたからだ。

「おう、来たな。まずな、そこに気をつけしろ」

小磯トレーナーが厳しい視線を向けて言う。内心二人はイラツと来たが、言うとおりにする。

「挨拶はいつの時間でも『おはようございます』だ。ジムに入る前に大きな声で言え。今言え。あいさつも出来ん奴にボクシングはでкин」

邦治が目を合わせてくる。チツ、しょうがねえな、と舌打ちしながら、馬鹿でかい声でおはようございまあす！と二人は叫んだ。

「元気がいいな。よし、おーい、典史^{のりふみ}」

「はい」

典史と呼ばれた、二人より少し年上の、快活そうな青年がやってきた。見るからに引き締まった強そうな体つきをしている。

「ロードワーク一緒に行ってきて。最初の準備体操から、じっくり教えてあげてくれ。この人は加藤典史、6回戦のプロボクサーだ」

「加藤です。今日は一日よろしく」

と、今日入った二人にも殊勝に頭を下げて自己紹介する。二人は、内心、コイツプロなんだ、すげえな、と思った。そこで、二人もおずおずと頭を気持ちだけ下げた。

「自己紹介しろよ。ま、二人ともシャイっぱいからな。こっちが京本勇也、こっちが君原邦治だな。じゃ、よろしく」

「そしたら、奥にあるロッカー室に案内するよ。着替えは持ってきてるな？」

と言いつつ、典史が奥に手招きする。昨日の事務室の横に、大きな更衣室があった。さらに、開いている扉の奥にはシャワー室のようなものもある。

「うはっ、臭いなオイ」

邦治が小声で言う。部屋に並んだロッカーは半開きや、酷いものになると全開のままで、足元にまでＴシャツやらズボンやらバンテージが散乱している。まだ五月の涼しい季節にもかかわらず、ここだけは梅雨時のような湿気が充満している。二人は軽いため息をついた。

「ここ、二つ開いてる。二人はここを使いなよ。あとで名札書いてもらっとく」

奥のほうの開いているロッカーで、二人は半そでの柄の毒々しいＴシャツと、やはり原色の派手なジャージに着替えた。何しろ運動できそうな服と言えばこんなのしか持ってないのだ。

「よし、行くか。まず準備体操をしよう」

そう言って、ジムの隅っこで三人は屈伸運動や柔軟体操を始めた。典史は体も柔らかいし、動きがリズムカルだ。二人は中学校以来、久々にきちんと体をほぐした。

「よし、じゃあ行こう。ジムの横手にある夢橋川をずっと上って行って、森由美術館のところまで行って帰ってこよう」

二人は一瞬目を丸くした。森由美術館だと？何km彼方だよ。なんて思っている暇はない。もう典史はジムを出て、前を走っている。勇也と邦治も続く。俺らタバコ吸ってるけど大丈夫なのかよ、などと自問自答している暇も無かった。ペースが早いのだ。ついていくのが精一杯だ。たまに典史がこちらを振り返る。その顔は涼しいどころじゃなく、息も切らしていない。一方二人は十分も走った段階で息が上がり、足が急に重くなった。脇腹も痛くなった。どんどん典史の姿が遠ざかる。前のほうでいそげようなどと言っているのが聞こえるが、返事も出来ない。汗が吹き出て、口にまで入った。勇也は唾を吐き、必死に手足を動かした。横の邦治も全く余裕も無

く、ただ前を見つめ、必死に走った。典史が戻ってきて、そんな体力じゃあ何ラウンドも戦えないんだぞ、頑張れ、ガンバレ、と同じペースで走りながら言う。二人には返事する元氣も無く、首を上下に動かすので精一杯だ。それでも、なんとか折り返し地点までは着いた。ここで一回休憩してえ、と二人は思った。しかし、典史はそんな事を言い出すそぶりも見せず、さあジムまで帰ろう、着いたらお茶が飲めるよ、などと言って、少しペースを上げた。二人に付き合っていたら、殆ど徒歩になってしまう。彼方に消え去る典史を恨めしく睨みつつ、とにかく二人は夢橋川を往復し、最後のほうは歩きながら、なんとか共英ジムに辿り着いた。全身汗びっしょりで、肩で息をしている。

「お帰り。初日にしてはなかなか早かったぞ」

そう言いながら典史は二人にコップに入れた麦茶をくれた。もぎ取るように奪い、一気飲みする。うまい。麦茶はこんなにおいしかったのか。勇也は感激した。思えば、汗をかく、と言うこと自体、一体いつ振りなのだろう。ジムの壁にもたれて座り込む。典史は、縄跳びをしている。横にラジカセを置き、ダンスミュージックのよなものを流しながら、リズムをとって飛んでいる。二重飛びになったり、変則的な飛び方になったりしている。二人はそれをまんじりともせずに見ていた。すると、音楽を止めてこちらへやってくる。「よし、じゃあそろそろ二人も縄跳びをやるうか。三分飛んで、一分休憩。今日は3ラウンドがんばってみよう」

言われて、二人は重い腰を上げた。正直、もう少し休みたかったが仕方がない。渡された縄を使って、ヨタヨタと飛び始める。邦治が足に絡めてこけてしまった。

「クソが」

いまいましそうに言って、また飛びはじめる。横で典史が、自分でリズムを取って、出来るだけ同じリズムで飛ぶんだ。今日はとにかく普通に飛ぼう。時間が来たら言うからな、と言ってくる。チーン、と時計らしきものなる。一分休憩、と言われて即座に二人は

しゃがみ込む。どうも視線を感じるの、周りを見たら、新人がヘタレてる、と言う風に見られているのが分かるが、今はそれも気にならないぐらいに疲れている。なんとか3ラウンドこなした。すると、次は筋肉トレーニング、と言われる。

「今日は最初だから、腕立て腹筋背筋百回ずつね」

と典史は言うなり、ものすごい勢いで腕立て伏せを始めた。明らかに自分はそれより多い数字をするつもりだ。二人も、歯を食いしばって床に手について、なんとか百回ずつこなした。腹筋がパンパンに張って、体自体が震えだした。

「そうしたら、今度は首を鍛えよう。とは言え、今日は逆立ちをして、頭をつけて一分だけね」

相変わらず涼しい顔の典史は、タオルを持ってきて、まず自分がやってみせた。その後、二人もやった。頭に血が上って、何かなんだかわからなくなった。気づけば、勇也はドシンと倒れていた。もう動けねーぞ、畜生、など思っていたら。今日の練習はここまでと言われた。思わず安堵のため息が漏れた。典史は二人に上がっていいよ、と声をかけ、自分は大きな鏡に向かって、シャドーボクシングを始めた。

「くそう、全身が痛え」

邦治が肩を揉みながら嘆く。勇也も同感だ。と言うか、話す元気もない。早く家に帰りたい。足を引きずってジムを出る。小磯が、明日も一緒の時間に来いよー、と声をかけてきたが返事もなかった。陽は傾き始め、二人の影がアスファルトに長く伸びる。自動販売機でスポーツ飲料を買い、瞬く間に飲み干す。それでもなおのどの渇きが収まらない。

「明日も一時だつてよ」

邦治がボソツと言う。今日を思い出してうんざりする。しかも、初日だから、と言う事で甘くしてもらっているのもわかった。

「しゃあねえ。しばらくバカみたいに走るのかなさそうだ」

邦治がポケットからタバコを取り出し、一口吸ったとたんむせて

咳き込んだ。

「畜生、タバコも吸えないじゃねえかよ」

ペツと吐き出して足で踏み潰す。タバコは止めないと駄目っぽいな、と勇也は思った。見上げたオレンジに染まりつつある空を、何羽かの鳥が優雅に舞っている。んじゃ明日も同じ場所だな、と言って二人は別れた。ボクサーになるのは思った以上に大変らしい、と身につまされた気がする。今日走った夢橋川を見下ろすと、爺さんだのオバハンだのもせつせと川沿いを走っている。ま、頑張るぜ。勇也は重い足を運び、家路へとついた。

第三話 決意

勇也と邦治が共英ジムに通いだして三日目、他にも練習生が参加して一緒にメニユーをこなす事になった。

「おい、あのタコ……」

邦治に突かれて、勇也も頷く。初日にガン飛ばしてくれたシルバークセ野郎だ。練習中も外さない気らしい。

「へっ、どうせすぐに辞めるだろ、あんなヘタレ」

とだけ言つと、勇也はスニーカーの靴紐を結び直した。今日も太陽が陽炎を作るほどに燃えている。正直、今日の練習をこなす事で頭が一杯で、周りの人間などどうでもいい、が本音だった。全身の筋肉がきしみだしている。

「みんなおはよう。今日もいこか」

と、典史がやってくる。今日は、勇也と邦治の他に、茶髪アクセ野郎と、スキンヘッドの重戦車みたいな体格の男との四人で練習のようだ。

「今日は熱いから、脱水症状に気をつけよう。マネージャーの美樹が自転車について来てくれるらしいから」

マネージャー？そんなのいるのか？勇也らは目を見合わせてキョトンとした。そう言えばジムにも女がいるな、女の練習生か、と思っていたが。柔軟体操を始めていると、奥から大きなポットを手に持った、長くまつすぐな茶髪の女の子がやってくる。

「ああ重いや。これ後ろに乗つけて走ったら後ろにひっくり返るかも」

「自転車が真後ろにひっくり返ったらギネスに乗るんじゃない？」などと典史と談笑を交わしている。勇也の目は釘付けになってしまった。瞳が強く、それでいてとても愛らしい顔をしている。その独特のアンバランスが目を引かずにいられない。ずっと見てしまったので、視線を感じたのか、勇也を見返してきた。二人はほんの一

瞬だけ見つめあった。が、すぐに勇也が逸らした。心持ち汗をかいた気がする。

「さ、行こう。今日は河原でダッシュもするからそのつもりでね」と言うと、典史はいつものペースで走り出す。その後ろを、ママチャリに乗ったあの女の子が追いかける。勇也らも続く。

「みんな、折り返し地点まで来たらひとまず休憩だから頑張っ
てね」

と、微笑を浮かべて、意外なほど大きな声で言うと、さっさと行ってしまった。その背中を見つめながら走る四人。雲ひとつ無い炎天下の中、ただひたすら走る。今日はまだ半分のところで一旦休憩があるだけでした。そう思い、できるだけ急ぐ。が、やがて、茶髪アクセのほうが前に行くようになる。なんだこの野郎、と勇也はいきんで必死に後を追った。が、明らかにヤツのほうが早い。スポーツ経験者だろうか、クソが、と勇也は唾を吐いた。とても追いつけない。それどころか、豆タンク野郎ですら俺達より早い。汗を乱して先に行く。結局、その二人に遥か遅れて折り返し地点の木陰に到着した。典史と、その女の子の視線がなんとなく辛い。

「よし、15分休憩。こんな暑い日は脱水症状になるから、麦茶飲んで、じっくり休もう」

思わずへたり込んだそこへ、あの女の子が、邦治と二人分紙コップにお茶を並々と注いで持ってきてくれた。

「はいどうぞ」

白い歯を見せながら二人にお茶を渡す、勇也らはボソツとお礼を言い、一気に飲んだ。体に染込むようだ。

「喉乾いてる時は、一気に飲み干すより、一旦喉で止めてから飲んだほうが、渴きが言えるんだぜ」

相変わらずいい奴な典史に、邦治は少しの反発を覚えた。お坊ちやんくせえ野郎だな。

「よし、休憩終わり。今から、ここでダッシュを20本ほどやろう。全力疾走と、流す程度のを交互にやるよ。美樹向こうに座って」

「ほいほい」

「あの例の石のとな」

「オツケー」

と美樹は返事をして、50mほど歩き、少し大きめで、丸い石の上にちょこんと座った。

「こつちからは全力ダッシュ、向こうからここに戻る時は流す感じだな」

そして、まず重戦車と邦治が並んで走る事になった。邦治は走るのは本来早い。短距離は特に得意分野だ。重戦車を遙か後方にゴールする。

「彼短距離早いな、いいね」

典史も感心するほどだ。よし、俺も負けてられん。横を見ると茶髪アクセもやる気のような。きつい目でこちらを見てくる。よいい、ドンの掛け声で勇也は全力で走った。茶髪も髪振り乱して必死だ。ほぼ同時に丸い石の横を駆け抜けた。こいつ、短距離も早いな。勇也は息を切らして思った。次だ、次で差を見せてやる。ところが、走れば走るほど、馬力が失せてきた勇也は、五本目ぐらいから逆に差を付けられはじめ、最後のほうは勝負も出来ず、なんとか走りきるのが精一杯になってしまった。

「よし、終わいい。また少し休憩して、ジムに帰ろう」

全身汗だけで座り込む勇也に、美樹がまた紙コップを渡す。

「二人とも足が凄く速いのね、これ見て」

と、視線も覚束無いほど肩で息をしている二人に、美樹がストツプウォッチを見せた。

「こつちが君原君、6秒4・こつちが京本君、6秒8・6秒台は相当早いよ」

二人はなんとも言えず、曖昧に頷いた。今は返事をするのもしんどい。美樹はその後、紙コップを回収し、先に自転車に跨ってジムへと戻っていった。どうやら体力測定を命じられていたようだ。

「よし、じゃあ無理せず、元気になったらまた走って帰ってきて。」

まだみんな初心者だからね、無理しないでな」

と言うと、典史もジムに帰っていった。ほんの少しだけ雲が出てきて、休憩する四人を影で包んでくれる。やがて、さほど息も切らしていなかった茶髪アクセが立ち上がり、走り出した。続いて重戦車も立つ。それに釣られて、二人も走り出した。肺が痛い気がする。禁煙は正解なんだろうな、と勇也は一人ブツブツ言いながら、川面に唾を吐き散らし、なんとかジムまで帰った。

その後も、筋トレや縄跳びと言ったメニューを何とかこなし、汗まみれでふらふらになって家に帰ろうとした。二人並んで歩いている時、後ろで激しいバイクのエンジン音が聞こえた。マフラーをぶった切った族車なのは音だけで分かる。

「おめー、浜工の勇也じゃねーか」

後ろを振り向くと、見覚えのあるモヒカン頭が四人の仲間と単車に跨っている。

「てめーは……夜叉魔狼やしゃまろうの特隊の都築か」

「よく覚えていてくれたな、カスゴミが」

言うなりエンジンを切ってこっちに近づいてくる。かつて数回、族の集まりに参加した時に、乱闘で喧嘩した相手だ。

「勇也、ここはまずいぞ。ジムに近すぎる」

「……」

「あ？何押し黙ってたんだ。ビビツタのか？浜工の二年坊の頭格だったユウヤさんともあろうモンがよ」

「俺は、ボクサーになるんだ。高校もとっくにやめた」

「は？それがどうした」

言うなり都築は勇也の左足の膝頭を蹴って、そのまま右の拳で顔面に殴りかかった。疲れている勇也は、かろうじて両手でそれを受け止めた。都築が二歩下がって距離を取る。

「もう、ケンカはしねえんだ」

邦治が驚いたように勇也を見た。

「おい、勇也」

「半端はしねえ、つつたろ、邦治。俺らはプロボクサーになるんだ」
「なんだかしらねえが、折られた奥歯の事は忘れてねえぞオラア！」

都築が左足で回し蹴りを入れてきた。勇也は腕でそれをブロックした。その足で、勇也の右足を思い切り踏みつけ、都築は強烈な頭突きをかましてきた。まともに鼻っ柱に食らい、よろける。そこへ、力を込めた右の拳が飛んできて、勇也は軽く吹っ飛んだ。邦治にも残りの四人の内の二人が襲い掛かってきた。何発かのパンチをかわしたが、後ろから木刀で頭を叩かれ、ふらついたところに強烈な膝蹴りを顎に食らい、血を吐いて倒れた。勇也も地面に転がされ、何度も腹に蹴りを入れられた。

「こんなもんかあ！こんなもんだったのか！」

都築は大声を出したあと、ふいに大人しくなり、四人を従えて去っていった。爆音が彼方に消えてしばらくして、邦治が先に立ち上がった。勇也は大の字になって伸びている。

「大丈夫かよ？」

邦治が揺るとパチツと目を開けた。

「……ああ。チキショー、手加減せず蹴りやがってよお」

言いながらふらつきながら立ち上がる。二人とも鼻血を出して、顔は紫色に腫れ上がって酷い風貌だ。

「ボクサーへの道は厳しいなあ……」

などと言いながら、二人は肩を貸し合い、「チャンピオン」を口笛で吹きながら夕暮れの中を家へ帰っていくのだった。

第四話 邂逅

その夜、勇也が顔を腫らして帰宅すると、母の観月はまた、と言う風に顔をしかめ、病院に行きましよう、と言った。が、勇也はいんだよ、うつせえ、と言いつつ、持っているスポーツバッグから汚れたＴシャツやズボンを洗濯機に放り込んだ。

「勇くんは最近体を動かしているの？」

と観月は恐る恐る尋ねた。実質離婚状態で夫婦別居になって五年になる。その頃から勇也は目に見えて荒れ始め、責任を感じているものの、心をひたすら閉ざす息子に、なす術もなく、しかし、密かな深い愛情を持ってこのまだ年齢の若い母は勇也に接しているのだった。半年ほど前に工業高校を中退し、日雇いの建築現場でバイトをし、全く将来の見えない日々に関月は胸を痛めていたのだった。が、この数日、服を汗まみれにして帰ってくるようになったので、不思議に思っただけ聞いてみたのだった。

「あー、あ、まあな」

とだけ行って自分の部屋に入っていく息子の後ろ姿を、いつまでも見つめるのだった。

勇也らが共英ジムに入門して二週間目に入った。トレーニングは段々とハードさを増してきた。拳にバンテージを巻く方法を学び、プロボクシングの知識も少しずつ教えてもらえるようになった。喧嘩した翌日、顔に絆創膏を貼って現れた二人だったが、幸いと言うか、ボクシングジムには面を腫らした練習生などはいくらでもいるので、さほど目立たなかった。ただ、小磯トレーナーだけはじつと二人を見つめ、何か言いたそうだったが、頷くだけで特段何も言わなかった。今日もロードワークを終え、ジムに汗まみれで戻ると、何か空気が違う。なんだ？と勇也が見渡すと、リングの上に、あの英雄がいた。

「た、辰山譲がいる」

口に出したのは邦治のほうだった。WBCライト級チャンピオンを既に三度防衛している世界最強の男が、トレーナーのミットを叩いている。その音はひときわ重くジムに響いており、勇也らだけでなく、他の練習生や、プロのライセンスを持つているランカーですらも何度も視線を向けている。短く刈り込んだ髪に、精悍で鋭い表情がひとときわ渋く見える。パンチのコンビネーションも早い。あんな連打を食らって立ってられる奴がいるんだろうか。二人は思わず見とれてしまった。

「初めて会えた……」

勇也がまんじりともせずリング場をひたすら見つめていると、典史が口を開けて笑い、

「見ながらでいいからほら、縄跳びするぞ」

と声をかけてくるので、縄跳びを始めたが、目はひたすらリングの上の憧れの英雄に釘付けになっていたので、派手に転んでしまった。邦治に笑われたので、縄で尻を叩いた。ともかくいつもどおり三分三ラウンド飛び終わった頃、辰山がリングから降りてきたのが見えた。そのまま勇也らの壁側にある長椅子にドカッと座り込んで、タオルで顔の汗を拭いた。間近で見るチャンピオンは、寄る者も寄せ付けぬ殺気を放っていて、勇也らは唾を飲んだ。その時、辰山と勇也の視線があった。辰山は、見慣れぬ顔だ、と言う表情をした。咄嗟に勇也の口が開いた。

「こ、こんちはっす。俺は新入生の京山と言います。辰山さんに憧れてボクシングはじめました！」

真実に思っていたことだからだろう、緊張の極限でも本当のことと言えた。言葉がすらすら出た。

すると、辰山は破顔一笑して、人懐っこい雰囲気が変わり、

「そうか。そりゃ嬉しいな。頑張るんだぞ」

と言って、立ち上がってなんと握手を求めてきた。勇也もおおずおと手を差し出した。勇也はこの時を一生忘れられないだろう。ひ

たすら感激していると、後ろから邦治もおずおずとやってきて、同じように辰山に憧れて入門した事を話した。辰山は二人と握手し、こう言った。

「いい面構えしてる。絶対に逃げたら駄目だぜ」

目を見つめ、はつきりとした言葉で言われた。勇也も邦治も、直立不動で聞いていた。そこらの奴の言葉とは重みが違いすぎる。辰山はそれだけ言うと、今度はサンドバックを叩き始めた。その威力、回転数、一発一発が弾丸を撃ち込んでいるような響きだ。二人は筋トレをしながらその音を聞いていた。その一つひとつが世界チャンピオンからの無言の激励のように聞こえた。

今日も練習を追え、更衣室で着替えていると、他の新人も上がってきた。勇也らの同期は結局後三人いることになる。シルバアクセの男と、重戦車の男と、あと一人は結構普通の大学生のような男だ。勇也らが気にせず着替えていると、初めてシルバアクセが「お疲れさん」と声をかけてきた。そこで、二人もなんとなくお疲れ、と返事すると、畳み掛けるようにこうやってきた。

「いいなあ、辰山さんに声かけられてたじゃん。俺も話したかったよ」

と、心底悔しそうに言って唇を噛む。どうやら、あの時の様子を見ていたらしい。するとコイツも辰山チャンピオンに憧れてここへ入門したのだろうか、と勇也は思った。

「お前も挨拶すれば？俺は自分から声かけたんだ」

勇也が言うと、そうか、でも俺にはその度胸がないや、と言って着替えて出て行ってしまった。案外シャイな野郎だな、と二人は思った。横から重戦車が、僕もお先です、お疲れ様でした、と声をかけてから帰っていった。

「おい、聞いたか今の声」

「高い声だったな。外見に似合わねえ」

そう言って二人は笑った。笑いながら、ああ、俺らはあいつらと

仲良くすべきなのかな、などと思っていた。

大きな声で挨拶をしてジムを出る。夕暮れでも日差しはまだきつい。早く家に帰ってシャワー浴びたい、などと勇也が思っていたら、向こうから二台の自転車走ってくる。滅茶苦茶飛ばしてんな、と思ったら、一人は見覚えのある顔だった。

「ゴー！ ゴー！ やった、私の勝ち！」

と、叫んだのはいつかの日に二人の50m走のタイムを計ってくれた長い髪を茶褐色に染めた女の子だ。自転車を地面にこすって、砂埃をあげてようやく停止する。少し遅れてもう一台到着したが、この女の子は知らない。

「ずるいよ、絶対そっちの自転車のが性能いいじゃん」

茶髪を右肩のほうで纏めてくくっている遅れてきた子が自転車を置いて座り込む。どこからか知らないけれど、二人で競争してきたのだろう。勇也と邦治が啞然と見ていると、女の子二人は視線に気づき、少し照れたように、

「お疲れ様、見ての通り対決してたのよ」

と説明した。二人は鷹揚に頷き、挨拶してそこを去った。だいぶ歩いてから、邦治が呟くように言った。

「二人ともすげえ可愛いな」

「ああ……そう思うな」

しかし、勇也は別の事を考えていた。

「初めて辰山さんに会えたな。しかも頑張れまで言ってもらった」

「おお、おう。超渋かったな。オーラが出てたよな」

二人はこの後も、ひたすら辰山のミット打ちやシャドーボクシングの凄さを称えながら、日の暮れていく川沿いの道を歩いて家に帰ったのだった。

第五話 変化

二人が共英ジムに入門してから一ヶ月ほどの時がたった。最初は辛くて仕方の無かったランニングや筋肉トレーニングも、ほんの少しだけ慣れてきて、余裕が出来てきた。その日も夕暮れまでひたすら体を鍛え、帰ろうとすると、小磯トレーナーに声をかけられた。「よく頑張ってるな。ところで、お前らまだ口座引き落としにはしてないよな？」

と言いながら、手の平を出してくる。

「月謝だよ。毎月一万三千円って入門説明書にあっただろ」

と、笑みを含んで言う。どうせ持っていないだろうな、と見透かされているのである。

「あう、それ、いつまでですか？」

「今日だ。でもその顔じゃ持っていないだろう。と言うか、お前ら働いてるのか？」

二人はうなだれた。毎日昼からジムに来なくてはいけないし、土日は建築現場は動かないので、全く働いていなかったのだ。

「いや、実は今無職なんつス」

そうだろう、と言わんばかりの顔をして小磯は頷いた。

「しょうがないな、じゃあ少し待ってやる。それと、いい仕事があるから紹介してやろう。お前らみたいなプロを目指す奴らにぴったりのバイトがあるんだよ、紹介してやろうか？」

二人は顔を見合わせた。が、これと言ってあてもない。話を聞いてみることにした。

その日の夜、二人はホテルヨークラの大きな洗い場で皿を洗っていた。あの後、小磯は自分の父親は全国規模の有名ホテルのオーナーなんだ、と鼻を高くして言い、そのドラ息子俺は遂にボクサー稼業から足を洗えずに今の状態なんだけどな、と照れ笑いをした。

とは言え、この小磯は世界ランカーまで行つて、世界戦間近で残念な事に査定試合で網膜はく離になってしまい、夢を絶たれてしまったという経歴を持つ立派なボクサーである。二人は初めてそれを知った時、あのサラリーマンそのものの小磯トレーナーが、なあ、と感心したのだった。二人は小磯に皿洗いのバイトを紹介され、あれよあれよと言う間に車で連れられて、即座に現場に放り込まれた。時給は九百五十円出すと言う話だし、まあ、皿洗いぐらいなら、と思つたらこれが大変なのだ。ホテルだから宴会用に大きな皿が山ほどあるし、一枚一枚が重い。やつと減つた、と思つたらどこからかウェ이터が次々と新しい汚れ物を運んでくる。ナイフだフォークだ持ちなれないものは多いし、洗浄機の熱気で熱いし、終わった頃には二人ともゲンナリとしてしまった。

「おい、どえらいバイトだぞこりゃ」

邦治が濡れたビニール手袋を外しながら言う。

「一日六時間、五千七百円か。週五日で、あー、う、月十一万ぐらいにはなるか」

勇也はなんとか暗算してみた。これまでもせいぜい週に三、四日しか働いてなかったので大して収入は変わらない。

「ボクシングシューズとかも買わなきゃいけないし、ここでいいだるもつ、探したり面接とかめんどいし」

「そうすつか」

と言う事で、二人はしぶしぶ皿洗いのバイトを続ける事にしたのだった。

毎晩夜遅くに帰ってくるようになった息子に、観月は不安を覚えたので、ある日は遅くまで起きて、勇也の帰りを待っていた。ドアが開く音がしたので、玄関まで出迎える事にする。

「勇くんお帰り。ご飯出来てるよ」

「あー、食べる」

いつものようにバッグからＴシャツなどを洗濯機に放りこんで、

すぐさま居間のテーブルに腰掛けた。黙々と食べだす勇也に、観月は問いかけた。

「どうして毎晩帰るのが遅くなったの？」

「バイト始めたんだよ、バイト」

トンカツをほおばりながら答える。半分放心状態のような雰囲気だ。

「夜のバイト？ファミレスとか？」

一瞬うざったそうに沈黙したが、やがて答えた。

「ホテル YORK ラの皿洗いしてんだ。ジムのトレーナーさんが紹介してくれたの。だから火曜と水曜以外はこの時間に帰るから」

言々とテレビのリモコンをいじって画面を眺め、もう口を開かない。ボクシングを始め、アルバイトも始めた。変わってきたのね、と観月は少し安心して、自分の部屋へ戻っていった。

ご飯を食べて腹いっぱいになった後、シャワーを浴びる。体を洗いながら、明らかに引き締まってきたのがわかる。ジムだけでなく家でも腹筋をしろと言われて、毎朝百回やっている。そういうのが積もってきたかな、と少しだけ満足した。風呂を上がって、自分の部屋に戻り、シュツと左ジャブを出してみる。まだパンチは何も教えてもらっていない。それどころか、まだサンドバックすら打たせてもらえない。それには内心不満が募っていた。邦治もそれは同じだった。明日辺り言ってみようか。そう思いながら眠りについた。

翌日、ランニングを終えてジムで休憩している時に、典史に勇也は聞いてみた。

「僕ら、いつになったらサンドバックとか叩かせてもらえるんすか」典史は目をしばたかせたが、うーん、と唸って、小磯トレーナーにはとりあえず三ヶ月体を作らせると言われてる、と答えた。

「俺もそうだったよ。三ヶ月間はひたすら走った。陸上部に入部したのかと思ったよ」

と白い歯を見せて笑った。勇也も横にいた邦治も首をうなだれた。
「んじゃ、せめてシャドーボクシングのやり方だけでも駄目ですか」
「うーん、うー、じゃあ、そうだな、左ジャブと右ストレートぐらいならいいか」

そして、二人を全面に鏡の貼つてある場所に連れて行き、左ジャブと右ストレートの構えと意識すべき事を教えてくれた。
「とりあえず500回打つてごらん」

そこで二人は言われたとおり、数を数えながらひたすら左拳を鏡の自分の顔めがけて打ち続けた。

「ちゃんと顎のところまで戻せ！カウンター食らうぞ」

「ちゃんと握り締めてるのか？そんなパンチきかねえぞ！」

200回を越したぐらいで腕が尋常でないくらい重たくなってきた。典史はさらにもっと早くとか言っている。勇也は鬼か、と思った。400回目ぐらいからもうパンチのスピードではなく、押しているだけになってくる。やっと500回終わった。左腕が鉛のように重く感じられる。

「一試合に打つジャブはもっと多いんだ。今日から毎日やるう」

余計な事を言ったもんだ、と勇也は後悔した。でも、ようやくとボクシングを始めたという実感が湧いてきた。

「じゃあ、次は右ストレートね。これは利き腕だから自然と力が入るだらうけど……」

と、典史が説明をはじめ、また二人は500回打たされた。右のほう時間がかる。一発一発を効かせるつもりで打て、と言われ、腰や背筋にも力が入り、さっきよりも遥かに疲れる。

「そんな右ストレートで相手は倒れねーよ！」

「左手下げるな。もろ右で返し食らうぞ！」

さっきの左ジャブ500回のせいで左腕が重く、つい顎の位置にないといけない左拳が下がってしまう。歯を食いしばって右ストレートを打つ。汗が吹き出て、目に入った。ようやく右500回が終わった。鏡の中の自分の顔が歪んでいる。

「よし、今日はここまで。向こうで休憩して、縄跳びね」
まだ残っているメニューを想像して軽い眩暈がした。しかし、自業自得だよな、と勇也は思った。隣で肩で息をしている邦治に心の中で頭を下げた。

「すまねえ。俺が余計な事言っちゃったからメニュー増えちゃって」
バイトのホテルヨークラへ向かう電車の中で、邦治に謝った。
「お？全然大丈夫だぜ。いよいよ人のぶん殴り方教えてくれてんだから楽しいじゃん」

と、伸びてきた髪をなでながら言う。スキンヘッドは怖がられるから止めることにしたらしい。

「でも腕重くなかったか」

「ああ、途中から重しつけられてるんじゃないかって言うぐらい重かった」

二人は声をあげて笑った。

「早くスパリングしてえなあ」

「なー。でもどうせ今の俺らじゃボコられるんだろうなあ」

一ヶ月も経てば、自分達と周りの練習生やプロとの実力さはわかるようになっていた。俺らじゃきつと誰にも勝てない。

「もつともつと練習して強くなるべ」

「おお。それしかないな、もう」

電車が目的の駅についた。二人は勢いよく飛び出した。

第六話 接近

「おい、お前らちよつと来い」

と、コワモテの武山トレーナーに呼ばれて、ジムに来たばかりの勇也と邦治は軽量用の体重計や備品がたくさんしまつてある部屋に入った。

「お前らも自分の階級を決めないと、身長幾らだ？」

二人はそれぞれ、勇也が176cm、邦治が179cmです、と答えた。

「ん、よし、じゃ体重図るぞ」

順番に裸足になつて体重計に乗つた。何だか、分銅みたいなものがついていて随分本格的な代物だ。

「京本、だっけな？京本勇也が65kgか。ライト級で行くか……？よし、君原邦治、だな。乗れ」

邦治は70kgあつた。二人は顔を見合わせる。そう言えばボクシングは体重別なんだつたつけ。

「ウェルター級までは下げられるな、とりあえず二人はライト級とウェルター級で行くぞ、覚えるよ、えーと、京本は61・235kg以下まで減量しろ。それから君原は66・678kg以下まで減らす、と」

二人とも3・4キロは減量しないといけないようだ。

「あの、絶対減らさないと駄目ですか」

武山はうつん？と瞬きした後、パンチパーマっぽい髪の毛を触りながら、ニヤリと笑つた。

「お前らプロ目指してるんだろう。なら、少しでも勝ちやすい条件を作らないとな。同じ体重なら、体の大きいほうが戦いやすいんだ。プロの中にはな、試合前になつたら10kg以上減量する選手もいるんだぞ」

「じゅ、10kg〜」

二人は啞然とした。人間はそんなに体重を減らせるものなのか？
「ま、そういうことだ。あとな、リーチ図るから手を伸ばせ、こう、キリストのようにだ」

言いながら武山はメジャーを取り出し、二人の両手の長さを測定した。

「うん、ま、身長に比べて少し長いな。いいぞ、リーチが長いと同じタイミングでパンチを出してもこっちが先に当たるからな。よし、んじゃ今日も練習開始だ」

と言った後、思い出したように付け足した。

「後な、今はまだいいけど、リングでスパリングする時のためにボクシングシューズ買っとけよ。その靴じゃリングで滑ってこけるぞ」

二人は頷き、更衣室に向かいながら、俺ら一緒の階級じゃなくて良かったな、ベルトの奪い合いをしなくてすむな、などと冗談を言い合っていた。

六月の鬱陶しい梅雨の季節のさなか、小雨に濡れながら走り、筋トレをし、鏡に向かってシャドーボクシングを終え、今日の練習もようやく終えたとき、典史が、ちよつとだけ残って欲しいんだけど、と言ってきた。

「今日皿洗いのバイトないよね、確か」

「ないっすけど、まだ何か練習すか？」

邦治が少々及び腰に聞いた。

「いや、そうじゃなくてね、備品のカウントを手伝ってあげて欲しいんだ。すぐ終わると思うけど、頭数が欲しいんだってさ」

横には茶髪ロン毛の、毛利剛と、豆タンクの森脇吾郎もいる。そこへ、茶髪をなびかせて小走りに白井美樹がやってくる。

「みんなごめんね、練習終わって疲れてると思うけど、備品のカウントをするだけだから、手伝ってくれるかな」

全員特に断る理由もないのでうなずく。勇也は、伸びている自分

のチャライ金髪を、なぜか無性にダサく感じた。案内されたジムの奥の倉庫には、会員のＴシャツやバンテージや、未開封のグローブなどが棚にうず高く積んである。奥で、もう一人のマネージャー、いつも茶髪を右肩で花柄の綺麗な模様のゴムでくくっている高月あずさが悪戦苦闘していた。

「援軍四人も来てくれたよー、さ、どんどんかたずけちゃおう」

そう言いながら美樹はテキパキと用紙を配り、製品の型番と記号に気をつけながらお願いね、と言いながら微笑む。共英ジムの会長の孫娘だと言う事はすでに二人も知っている。あの美貌なので、当然もてまくるはずなのだが、鬼の会長の孫にはだれしもおいそれと手を出せないに違いない。共英ジムの白井会長は、ジムに巨大な額縁に入れて写真が飾ってある。その写真では、二本のベルトを腰に巻いている。オリンピックの銀メダリストであり、同時に日本人初の世界フライ級のチャンピオンだ。が、老いには勝てず、最近では殆どジムにも顔を見せないが、一度勇也が見たときは、まさにラストサムライと言った風貌であった。このジムには他にも辰山以外にも現役の世界チャンプが二人ほどいて、練習環境としては最高なのだった。

そんな事を考えながら、勇也が縄跳びの縄の入った袋の数を数えていると、あっと微かな声が聞こえた。と同時に、頭の上に小さな箱が落ちてきた。

「ごめんなさい！ 落としちゃいました」

横でワセリンの箱をカウントしていたあずさが誤って箱を落としてしまったのだ。

「いいよ」

とだけ言つと、箱を拾いあずさに手渡す。あずさは少し怯えている。勇也は、無理ねーな、女に好かれた試しもないし、と思ってまた数を数え始めた。あずさは、上の段から順に数え、段々下に下りてきて、今は勇也の真横に座って、何かのダンボール箱を開けて中

を数えはじめた。勇也の鼻腔を嗅ぎなれない優しい匂いがくすぐる。女の子の香り、だな。密かにそれを楽しんでいる自分に気づいてハッとした。柄でもねえ。そう思っても本能は正直なもので、あずさの存在を証明するその香りにまどろむように数を数えた。案の定、何度も数え間違った。やがて、あずさは隣へと去っていった。勇也の幸せな時間は終わった。

「ありがとう！ 全部数え終わりました」

美樹が大きな声で終了宣言をした。あずさも微笑んで四人に頭を下げた。何歳なんだろう、と勇也は思った。そして、さっきの香りを忘れたくない、と思っていた。

第七話 打撃

八月の暑さのさなか、勇也と邦治は初めてサンドバックを打たせてもらえることになった。

当初典史が言っていたように、入門して三ヶ月は完全に体づくりをやらされた。そのおかげで、今では夢橋川往復のロードワークもそれなりの速度で走れるようになったし、その他のメニューもきちんとこなせるようになった。

「よし、今日からお前らにサンドバック打ちを教えてやる」

と、声をかけてきたのはあのコワモテヤクザ風味の武山だ。まず、バンテージを巻くように指示され、巻き終わると、用意されていたのは二つのボロツちいグローブだった。

「ジムの汗と伝統の染み付いたグローブだ、感謝しろ」

などと言われながら、手首の紐を巻いてもらう。勇也は手を開いたり閉じたりしてみた。ギシ、ミシツと音がするような気がした。

そうして二人の手には生まれて初めてボクシンググローブが装着された。邦治は、軽くジャブを出してみた。思った以上に面積がある。

「よし、そいじゃ、コイツにまずジャブを打ってみろ、勇也はそっち、邦治はこっち」

と、今は誰も使っていない、天井からぶら下げられた二つのサンドバックの前に案内された。

つぎはぎのある古いサンドバックだが、何か重厚なものを感じて勇也はすくんだ。

「よし、打て！」

言われて、ともかく左を思い切り叩きつけてみた。ドシツ、という音がした。左肩に重い衝撃が来て、体に響いてきたのがわかった。この感触を俺は知っている、と勇也は思った。かつて、散々ケンカしたときに拳から感じていたあの衝撃だ。もう一度打った。響く、

響いてくる。密かに勇也は興奮しだした。何度も打つ。気づくと、武山トレーナーがサンドバックに体を預けていた。

「勇也、右も打て。ワンツーだ」

言われて、典史にシャドーボクシングで教わった通りに左、右の順で打つ。右に意識が入りすぎて、一発目の左ジャブが軽くなった。もう一度、もう一度、と何度も繰り返す。武山の表情が変わる。不敵に微笑んだあと、しばらく繰り返せ、とだけ言って、今度は邦治のサンドバックにくつついた。勇也は息を荒げ、繰り返し殴り続けた。ようやくと、と言わんばかりに、何かを解き放つかのように。

次第に何故かいらだってきた。何故かはわからない。ともかく、こいつを倒す。その「こいつ」が誰かだってわかりやしない。だが、とにかく殴るんだ。ガムシヤラにひたすら打った。と、武山が「よし、一旦ストップ」と声をかけてきた。邦治は止めたが、勇也は止めない。いつしか「ウオオオオオッ！」と咆哮を上げていた。フォームも何も無い、体ごとサンドバックにぶつかっていた。大振りで、とにかく殴っていた。武山が後ろから羽交い絞めにして勇也を止めた。勇也は我に返った。邦治が心配そうにこちらをみていた。そこへ、小磯トレーナーがやってきた。

「勇也、気合の入ったサンドバック打ちだったな。だがな、そんなに殴ると拳が砕けるぞ」

言われて、初めて拳に痛みを感じた。中で皮ぐらい擦りむけたかもしれない。グローブの紐を解きながら、小磯は話続けた。

「ボクサーは拳が命だ。これを潰しちまうと何も出来ないんだ。時間を決めて、少しずつ拳も強くしていくんだ」

「はい」

勇也は呼吸を整えながら返事した。だが、不思議な爽快感も得ていた。

あくる日の午前中、練習前に勇也と邦治はアイシスワールドスポーツと言うスポーツ用品をたくさん揃えているショッピングセンタ

ーへ来ていた。小磯に紹介されて、リング上で練習するためのボクシングシューズを買いに来たのだ。ボクシンググッズが揃えてある店舗に入り、物色していたが、なんだかいろんな種類があつてよくわからない。

「おい、邦治、どれにするよ」

「あー、わっかんねえな。一番安いのにする？」

と、ふと視線を感じた勇也が店の奥を見ると、そこに見知った顔の女の子が二人いて、買い物かごをぶらさげてせっせと何か買い物をしている。

「あ、あれ美樹さんと高月さんだぞ」

ようやく髪の毛が伸びてソフトモヒカンにしている邦治が目を輝かせた。勇也は何故か恥ずかしくて目を逸らした。が、向こうもこちらに気がついて、二人揃ってこちらにやってきた。

「おはよう、君原くん、京本くん。何見てるの？」

鬼の白井会長の娘で、ジムのマネージャーの美樹はいつも快活だ。邦治がデレレして、俺らボクシングシューズ買いに来たんだけど、どれがいいのかわからないっすよ、などとバカ正直に告白した。

「あー、そうなんだ。うーん、二人ともインフアイターっぽいよね、じゃあこれがいいよ」

と、さつさと相応しい種類を選んでくれる。そう言われると、いかにもそれを履けば強くなれそうな気がする。

「じゃあ、これにしようぜ」

邦治は言うが早い自分の足のサイズのを探し出した。勇也もそれに倣う。チラツと高月あずさのほうを見たが、視線はあわなかった。少しの寂しさを感じ、それじゃこれ買います、と言ってレジへ向かう。美樹らは買い物に戻り、勇也らは店を出た。出たとたん、勇也は言った。

「俺よお、散髪行ってくるわ」

「ん？ 急になんだ？ んじゃ俺先に帰つとくけど、どんな頭にすんの？」

勇也はしばし黙った後言った。

「金髪のロン毛は止める。せめて短髪にする」

「そっかよ。俺みたいにソフモヒにすりゃいいぜ。今流行ってんだ
こっこののが」

おー、とだけ言いながら、勇也は考えていた。なんで急に髪型変えようなんて思ったんだろ、と。

第八話 夢中

勇也はこのところ共英ジムに向かうのが本当に楽しみになっていた。朝跳ね起きると、うずくように家を飛び出して、近所の公園でシャドーボクシングをしていた。体力が有り余っているとは言わないが、とにかく体を動かしたい、ジャブやストレートの練習がしたい、ダッキングやウィービングを身につけて仕方がないのだ。さらに、早くジムでサンドバックやミットを打ちたくてむずむずしてくる。汗をかいた時点で家に戻った。

あの日以降、少しずつサンドバックの打ち方、それにフックやアッパーと言った新しいパンチも教えてもらい、そして、一週間ぐらい経った日に、武山に呼ばれた。

「勇也、靴履き替えてリングに上げれ」

勇也が美樹に教えてもらったボクシングシューズに履き替えて、こわごととリングに上がろうとすると、まず靴の底にワセリンを塗れ、と言われた。

「それつけないと滑って転ぶんだぜえ」

などと言いながら武山は丁寧につけ方を教えてくれた。武山は元キックボクサーで、白井会長と縁があつて今はボクシングのトレーナーをしているらしい。

「噂じゃタイのムエタイ式のラジャナムナンのランカーだったらしい。本人に聞いても否定するんだけどな」

と、茶髪オールバックの毛利剛がこわごと言っていた。勇也的には元暴力団員のほうがしつくりくるな、と思っていた。

「よし、勇也。今日から俺がミット打ちを教えてやる。いよいよボクシングを始めるんだぜ。まず、ジャブ！」

「はい！」

と勇也は気合を入れて武山の左手にはまったミットを打った。バ

シツ、といういい音がした。

「そうだ！ どんどんリズムミカルに打て」

言われて、何発も連続で、息を吐き出す瞬間に打った。人間は息を吐いている瞬間に一番力が入るのだ、と教わったからだ。

「相手は動くし、反撃もしてくるんだ。もっとシャープに！ 細かく速く！」

勇也が言われたとおり打つと、ジム内に力強い衝撃音が響き渡る。他の練習生も、プロのランカーもほーっと言う声を上げた。

「あいついいジャブ持ってるな」

「体もしなやかで自然じゃん」

その傍で見ているのが邦治だ。あいつだけいいなあ、と思っていたら、小磯がやってきて、心配するな、終わったら次はお前だからと肩を叩いたので、邦治も安心してまた縄跳びを始めた。

「次はワンツー。左を打つたと同時に右。その時絶対にガードを下げるなよ」

勇也は必死にシュツ、シュツっと言いながらミットを打った。すると、急にバチンと左頬をミットで打たれた。

「ガードが下がってる！ カウンター食いたいのか」

気づけば知らずに左の打ち終わりにガードを無意識に下げてしまっていた。打つのに必死だったからだろう。今度はガードを下げないように、あごに添えるように意識して打つ。そうすると、どうも手打ちのようになってしまう。

「ほらほら、そんなパンチで相手が倒れるのか？」

言われて悔しくてまたがむしやりに打つ。すると、今度は武山が円を描き出した。

「相手は止まってないぞ、お前も動け」

なるほど、と思い、武山を追いかけのようにステップを踏み、ワンツーを打つ。が、どうも足腰が定まらず、手打ちになってしまう。「どうだ。難しいだろう」

10分ほども打たせてもらっただろうか、武山がニンマリして言

う。全くその通りだ。動かないサンドバックと相手が動くミット打ち
ちはまるで違う。

「よし、お前は今日はここまで。邦治と代われ」

「ありがとうございました」

頭を下げ、リングを降りる。途中でロープに足が絡まってこけそ
うになった。慣れないボクシングシューズがまだ足にあっていない
気もする。

邦治も同じようにミットを打ち始めた。体格の違いもあるが、パ
ワーはあいつのほうがあるなあ、と勇也は靴を履き替えながら思っ
ていた。ふと、視線を感じると、それは何かを運んでいる高月あず
さだった。すぐ向こうが目を逸らしたので、それ以上見つめるのは
止めた。

「どうした！もつと速く！」

と言われて必死に邦治が連打している。表情は、やはり嬉しそう
だ。だよな、俺ら人をぶん殴るためにジムに入ったようなもんだも
んな、と思った。

練習の終わった帰り道、バイトの無い勇也らは、同じく何も予定
はないと言う茶髪の毛利剛と、豆坦克の森脇吾郎を誘ってお好み
焼き屋によって帰ることにした。

「あー、腹減ったぜ」

邦治が椅子にどっかり座って言った。三人とも同感、と言ってメ
ニューに見入る。

「んでよ、吾郎はガッコ行ってるのかよ」

注文を終えた勇也が聞いた。

「僕は夜間の二部っすから。今日も行きますよ」

と、カバンから教科書なんて出してくる。声が高いいので安田大サ
ーカスの黒ちゃんを彷彿とさせて、いつもつい笑ってしまう。

「苦学生、って奴だなあ、で、剛は暇人無職、と」

「アホ。つか俺は一応高卒だし、お前らより二個も上だ、敬語を使

え敬語を」

はいはい、と勇也らは流した。剛は最初こそ突っ張っていたが、今ではこの四人は自然と打ち解けて仲良くなっていたのだった。

「さっさとプロボクサーになれば、世間様への肩書きもできらあ」

そう言つて剛は拳の先をなでた。タコのようなものが出来ている。そんなものはまだ他の三人にはない。

「それ、なんで豆みたいなのがあるのよ？」

「家でひたすら砂袋殴つてんだよ。硬い拳が相手をぶっ飛ばすのさ」
邦治が俺も家でやろう、と言つたので、ホームセンターに行けば売つてるぞ、園芸コーナーにな、と剛が言つて、みんな笑つた。

運ばれてきたお好み焼きやモダン焼きを全員無言で凄い勢いで食べだした。吾郎など二枚も注文している。勇也は瞬く間に皿を空にした。

「プロテスト受けられるのいつになるだろうなあ」

同じく食べ終えた剛が応じる。

「早くて来年だってよ。まだだいぶ先だぜ」

「うーん、それまでひたすら練習しますかあ」

そう言つて四人は笑つた。店内に新しいお客さんが来たので、店を出て、それぞれ家路に向かい、吾郎だけは学校へと向かった。

第九話 屈辱

こんな……グフツ。

勇也はリングの上で膝をつき、動く事も出来なかった。呼吸は出来ず、喉が虚しく開くのが分かった。

やがて、その姿勢を保つ事すら出来なくなり、リングに突っ伏した。周りの人たちもただそれを見つめている。

「よし、勇也、そこまでだ。リングを降りよう」

典史がそう言いながらリングサイドからロープをくぐって入ってきた。武山は敢えて何も言わずにリングに立っていた。相手をしていた四回戦のプロボクサーはロープにもたれて呼吸を整えている。

勇也はまだ動けないので、典史がそつと脇に手を入れて、少しずつ動かした。勇也は引きずられるようにリングを降りた。邦治が顔面蒼白になって震えている。今日は、二人の初めてのスパarringsの日。あんなに意気高揚だった勇也が、たったの一ラウンドも立っていらなかったとは。邦治は驚きと同時に怒りが湧いていた。渡されたマウスピースを強く噛み、ヘッドギアを何度も調整し、視界を確認し、呼ばれたのでシューズにワセリンを染み込ませ、勢いよくリングに上がった。勇也はリングの外でひっくり返った。

「三分二ラウンドだ。しっかり頑張れ」

レフェリーを務めてくれている武山にそう激励を受け、邦治はバチンとグローブを両手で叩き、相手ともグローブを合わせて試合を始めた。相手はプロライセンスを取ったばかりで、ボクシング歴もさほど変わらない相手だ。負けるかよ、と言わんばかりに邦治は最初から出て行って、果敢にジャブを放った。だが、それらはクリーンヒットせず、全てグローブでパリング、払われるか、ステップとスエーでかわされて届かない。

邦治がイライラした頃、相手はスッスツとジャブを出してきて、それらは邦治の鼻っ柱を叩く。それが続くと、邦治の出足が止

まっってしまった。そこへ、相手が踏み込んできて、左フックを打ち込まれた。軽く視界が揺れる。と同時に、右わき腹に重い衝撃が来た。思わず体を丸める。すると、頭がぐらりと揺れる。足元がふらついたのが分かった。下がって逃げようとしたら、背中に何かが当たった。それはコーナーポストだった。

「邦治！そこから逃げろ」

典史のアドバイスが飛ぶ。だが、体が思うように動かず、顔を何発もの衝撃が襲う。慌てて邦治は相手に抱きつき、なんとかクリンチで逃れた。口の中が痛い。切れたかもしれない。

「よし、ここから」

一旦リングの中央に戻されて、また試合再開。邦治も必死にパンチを出した。下がったら駄目だ、相手の思う壺だ。だが、パンチは虚しく空を切るばかりだ。近寄らねば、と思い切って踏み込んだ。しかし、相手はくるりと体を入れ替え、邦治はまるで闘牛のように誰もいない場所に左を振っていた。焦って振り向くところにボディーブローを鳩尾みぞおちに入れられた。目の前が真っ暗になって、気づけばリングに崩れ落ちていた。

その後、勇也と邦治は痛む腹を抑えながら、言われたとおり他の選手のスパarringを見学させられた。

「自分と重ねてみる。人の上手な技術を盗め」

武山からはそうアドバイスを受けた。二人とも、頬が紅潮している。悔しさにはらわたを煮え繰り返しているので、お互い一言も口をきかない。こんな惨めさを味わったのはいつ以来だ、と勇也は齒軋りしていた。思い出した、誘われて暴走族の集会に参加して、よその族と乱闘になったときだ。自慢じゃないが、ゾッキー相手でもケンカには殆ど負けなかった。勇也は右拳に自信があり、入ればまづ相手は吹っ飛んで突っ伏した。だが、一回、敵の族の頭格とタイマン張った時、相手は恐ろしくタフで、最後には膝蹴りを腹に入れられて同じように動けなくなって、足で踏まれ、顔に唾を吐きかけ

られた。あいつは強かった。あの時以来の屈辱だ。勇也は体が震えだした。俺は全然弱い、話にならない。そういう事実を厳然と突きつけられた。目の前でプロボクサーたちが高度な技術の応酬を見せてくれている。目を逸らすな。アイツラに勝てるようにならないと、到底夢の世界チャンピオンになんてなれないんだ。拳を握り締め、床を殴り続けた。俺は、誰にも負けない。負けないんだ。その様子を小磯が微笑みながら見ていた。

その日の夜中、勇也は皿洗いのバイト帰りにも関わらず、全く眠れなかった。体は疲れているはずなのに、目が冴えて仕方ない。うーっ、と声をあげ、眠っている母親に悪いと思い、そっと家を出た。歩いてすぐの場所にある公園へ行き、目をギラギラさせて徘徊した。何度も、今日の試合が思い出される。思わず立っているツツジの木を殴ろうとし、拳を痛めると思っで寸止めた。夜空を見上げると、半月が綺麗に光り輝いている。うくっ、と声を出し、ベンチに座り込んだ。頭を振り、短く刈った頭をかきむしる。ふと、あの後の光景が目に見えた。黙ってスパarringを見ていた時、横を高月あずさが通った。その目は、同情心を表していた。軽く会釈され、勇也も軽く頷いた。女の前でKOされ、その失態に同情される。男としてこんな惨めな事が他にあるとは思えない。一瞬、もろくシングを止めようかとすら思った。が、すぐにぐああーっ、と勇也は声をあげ、そして誓った。

もつと、もつと強くなる。こんな弱いままで終われるか。

公園にある水道の蛇口の下に頭をおき、激しく水を流した。つまらないプライドは全て洗い流してしまおうと思った。

俺は弱い、弱いから強くなるために練習するんだ、それ以外何も無い。

水浸しになった頭は、随分軽くなった気がする。吹っ切れた勇也は、月の照らす公園を確かな足取りで帰っていった。

第十話 試行

勇也はあの日以来、まずパンチングボールを一生懸命やることにした。正確に動く相手を見定めてパンチを当てなければいけない。また、暇を見つけては邦治と寸止めスパーリングを行うようにした。幸か不幸か二人のボクシング技術は同じくらいなので、いい勝負になる。

ともかく、幾ら威力のある拳を持っていようが、相手に当てないと意味が無いのだ。そう思い、実践のスパーリングでもまず大振りを止めて当てに行く事にした。

「よし、勇也、今日もよろしく」

と、いつも相手をしてくれている四回戦のプロボクサー、真咲紳一が声をかけてくる。プロになって嬉しくて仕方ない、と言うオーラを出していて、練習も乗りに乗っている。だが、いつまでもやられっぱなしになってるわけにはいかない。ぐっと腹に力を入れて、リングに立つ。

「三分ニラウンドだぞー」

武山が言い、ゴングが鳴った。カーン、と言う音は勇気を奮い起こさせる。ぎこちなくフットワークを使い、相手の左に回るように円を描きながら紳一に迫る。紳一もリズムカルに体を上下左右に揺らしながら間合いを詰めてくる。視線が合った。その瞬間に早い左が伸びてくる。グローブでがっちり受け止める。引き際に合わせるんだ。ワンツーが飛んできた。勇也も合わせて右を放った。相打ちだ。視界が一瞬飛ぶ。

目を逸らすな！ 武山の激が飛ぶ。そうだ、俺は打たれたら思わず顔を背けてしまっただった。きつちりと相手を見据え、恐れず踏み込んで果敢に手を出した。一瞬、紳一の顔色が変わった。グローブを固め、ガードに徹する。ここだ！ 勇也は畳み掛けるように左右のフックを叩き込んだ。紳一が下がって、足を使って距離を取っ

た。

「何してる！追わんか」

武山の声でさらに前へ出た。が、そこへ早いジャブが何発も飛んできて、足止めを食らう。すつと紳一の体が沈みこんだ。勇也は一瞬反応出来なかった。強烈なアッパーの衝撃がヘッドギア越しに伝わった。勇也は二、三歩たじろいだ。が、踏みとどまって頭を低くして前に出て、左右のパンチを放った。そこへ、ゴングの音が響いた。なんとか一ラウンドは持つようになった。

コーナーにもたれ、呼吸を整える。体力はついてきたはずだが、全力で拳を振るうと思った以上に疲れる。リング下から邦治が親指を立ててくる。とにかく二ラウンド立っている、と言うのが情けない事ながら今の目標なのだ。

再びゴングが鳴った。勢いよくコーナーを飛び出し、左を放った。意表を突かれた紳一のペースが狂う。思い切ってボディーにフックを入れる。確かな手ごたえだ。どうだ！？と顔を見た瞬間お返しのボディーブローを食らった。が、あれ以降腹筋を必死に鍛えているので、一発やそこらではもう倒れない。リング中央で頭をつけて殴りあった。勇也の右も入った。紳一の左も決まった。クリンチになって、武山が分けた。

体が熱い。動きたびに蒸気を噴出しているような気持ちになる。ジャブを避けられなくなってくる。距離を一気に縮めようとして、逆に右をもらってしまった。まずいつ、と思った瞬間、ゴングが鳴った。二ラウンド終わった。

「ありがとう」

「ありがとうす」

とお互い挨拶し、ふらふらとコーナーに戻って、リングを降りた。危なく今日もKOされるところだったぜ。顔をタオルで拭きながら首をかしげる。リング上では続いて剛が試合を始めた。茶髪をヘッドギアに押し込めて紳一とやりあっている。剛のボクシングは直線的だが、上手く亀ガードを使ってクリーンヒットを防いでいる。ま

た、手数が非常に多いように思える。あいつ、やるなあ、と勇也は思っていた。

「今日も頑張ったな」

と、横の邦治が微笑んで言った。邦治のスパーはこの後のようだ
「なんとか立ってただけだ。ホント紳一クンも強いわ」

「プロ、だもんな」

邦治はバンテージを巻きなおしながら何かを確かめるように言った。

俺達より一段高いところに辿り着いた奴だ。その努力も汗も俺らよりはるかに多いはずだ。

「うっしゃ！今日は紳一クンをぶっ倒してくるぜ」

そう言っ、邦治は勢いよく立ち上がった。勇也はいけっ、と言っ、って背中を叩いた。

第十一話 応援

「ほれ、勇也と邦治の分」

と、二人も武山トレーナーから今日の試合観戦のチケットを渡してもらった。勇也が横にいる邦治に手渡す。

今日は、夜の八時から共英ジムの先輩の国元涼の日本フライ級タイトルの挑戦試合の日だ。それゆえ、練習は早めに切り上げられ、ジムの練習生は総出で日本武道館へと応援に行くことになった。大挙して共英ジムの一同はジムを後にした。その数は百人を越すだろう。

「すげえ集団だな」

剛がささやいてくる。

「この面子にケンカ売った奴はとんでもない目に遭うだろうな」

と、邦治もおちよける。勇也も吾郎も横で笑った。

そろそろ夕日が沈みだす頃、共英ジム一行は日本武道館に到着した。指定席のチケットを割安で取ってもらっているの、勇也らも比較的中央のリングの見やすい位置の席があった。

「えーっと、西側のDの72番席……」

勇也がチケットを見ながら席を探す、あつた、この段だ。一つ一つの席を確認しながら歩いていく。やっと見つかった。と、隣を見ると、そこには高月あずさが座っていた。後ろから邦治、剛、吾郎がここだここだと追いついてくる。ともかく、座らねば。勇也がちょこんとそこに座ると、あずさが少し微笑みかけてきた。勇也はどんな顔をしていいかわからず曖昧に返した。邦治らは、席につくなり腹が減ったのと言って、買ってきた菓子パンなど食べた。そこで勇也もとりのあえずアンパンを取り出して食べた。今も、リング上では前座の六回戦のボクサー同士が試合をしている。

「国元先輩、勝てるかなあ」

吾郎が言う。剛が自信満々に言う。

「昨日までの気合は尋常じゃなかったぞ。近づくのも怖いぐらいだったぞ。必ず勝ってベルトを獲るさ」

「でもさあ、現チャンプの鷹倉つて強いらしいぞ。五回も防衛してるんだってさ」

邦治が持つてきた『月刊ボクシングファン』を開きながら言う。

勇也も読ませてもらったが、相手は磐石のチャンピオンらしい。特に、必殺のアップercutの切れ味は相当なものらしい。

「信じるしかないぜ。俺らの国元先輩が勝つてよ」

勇也が言うと、三人は納得し、一生懸命応援するぜ、と誓い合うのだった。

やがて、前座が終わり、会場が静かになった。

「入場が始まるよ、大きな声でみんな盛り上げて！」

と、あずさの横にいた白井美樹がこっちに呼びかけてきた。オオッス、と返事し、声を張る準備をした。会場が暗くなった。

「これより、本日のメインイベントを行います」

リング上にイベントが上がり、マイクで厳かに宣言した。会場の空気が震えたのが勇也にも分かった。凄い緊迫感だ。

「青コーナーより、挑戦者の入場です！」

同時に青コーナー側の通路にスポットが当たり、国元先輩が出てきた。体は汗で光り、顔つきは引き締まり、気合は十分だ。後ろから小磯トレーナーらもついてくる。勇也らは声の限り国元センパイ、と叫んだ。

「しびれるな、おい」

邦治が固く拳を握り締めて、ひたすら中央を見つめている。国元がリングに上がった。ひととき歓声が起こる。隣のあずさまで大きな声を出した。

「続きまして、赤コーナーより、チャンピオンの入場です！」

一瞬会場が静まり、そして現チャンピオンの鷹倉渉が派手なコスチュームで登場すると、人気チャンピオンだけあって、さっきよ

りもいつそう激しい歓声が沸き起こった。筋骨隆々のいでたちも王者に相応しく、一瞬こちらの共英サイドが飲まれてしまうほどだった。

「たっかくら！ たっかくら！」

鷹倉がリングに上がると、早くも鷹倉コールが沸き起こる。勇也らは負けちゃいけないえ、と「くっにもと！ くっにもと！」と必死で叫んだ。

「それではただいまより、メインイベント、日本フライ級タイトルマッチを行います。青コーナー、170センチ109パウンド、共英ジム所属、くにもーとー、りょうー」

ウオオオオツ、と歓声が上がる。国元も拳を突き上げて答える。凄まじい形相をしている。

「続きまして、赤コーナー、168センチ108パウンド、帝剣ジム所属、たかくらー、わたーるー」

今度はドオオオオツ、と地鳴りのような喚声が響いた。同時に、応援団のような人々が太鼓を打ち鳴らした。高倉は余裕でステップを踏んで観客に答えた。両者がリング中央でレフェリーの説明を聞く。二人は顔を近づけ、激しいにらみ合いをした。おでこがくっついてるんじゃないか、と言う近さだ。

「国元先輩パネエぞ！」

剛が絶叫した。会場のボルテージも最高潮だ。そして、ゴングが高らかに鳴り、いよいよ試合が始まった。

序盤、国元が積極的に手を出した。鷹倉は、様子見のように余り手を出さず、ロープに詰まるシーンもあった。その調子で、二ラウンドまで終わった。日本王者戦は十回戦、10ラウンドまである。長いラウンドの中で、両者にしかわからない駆け引きがあるんだろうな。勇也はそう思っ、汗をかいた手のひらを何度もズボンでこすった。

三ラウンド目から王者が積極的に出てきた。国元のパンチの種類や距離感を掴んだのだろう。鷹倉のパンチが当たりだした。

「うっう」

吾郎が豆タンクの体を揺すって声を上げた。やはり、押されつつあるのは素人目にもわかる。リングサイドから激しい野次が飛んでいる。

五ラウンドまで終わった。いよいよ意気上がっているのが鷹倉陣営だ。勇也らは、声を枯らして国元の名を呼んだ。ふと、勇也の手が何かに触れた。それは振りかざしたあずさの手だった。何か恥ずかしくていたたまれず、リングを凝視して誤魔化した。

六ラウンド目、国元は戦法を変えた。打ち合いを避け、ヒットアンドアウェイを始めた。まともに打ち合うと王者に分がある、と小磯は踏んだのだった。そしてそれにはもう一つ意味があった。鷹倉はハードパンチャーだが、足は余り速くない。そこを突こうと言うのだ。小磯の策は当たった。素早く出入りを繰り返す国元を鷹倉は追いきれない。膨らんだ筋肉がかえって邪魔になっていく感じがした。六ラウンドも終わり、七ラウンド目、今度は鷹倉が戦法を変えた。どっしりと構え、動かずにじっと一箇所立っている。国元はやりにくそうだ。動かない相手では隙を見つけて飛び込むのが逆に難しい。鷹倉はさらに大胆にもノーガードにしたりする。業を煮やした国元が思わず不用意に飛び込んでしまった。

「ああっ！」

邦治が思わず声をあげて立ち上がった。

飛び込んだ国元に鷹倉の狙い済ましたアップercutがきれいに顎に入ってしまった。思わずうつ伏せに崩れ落ちる国元。勇也はその光景をスローモーションのように見た。

「ダウン！」

レフェリーがカウントを始める。鷹倉は余裕でコーナーに歩いていく。国元は両手を軸に必死に立とうとしている。

「がんばれ、がんばれ！」

四人とも立ち上がって拳を振りまわした。いや、四人だけではな

い、共英サイドの応援席、殆ど全員が立ち上がって、立てーッ、と叫んでいる。

「7、8」

カウントが無情にも進む。が、国元は立ち上がった。レフェリーが意識を確認する。「ファイッ！」試合は続行だ。コーナーから鷹倉が、獲物を追い詰める虎のような表情でゆつくりと歩いてくる。立ったままの剛が電光掲示板を見ながら、「まだこのラウンド1分以上もありやがる」と齒軋りした。

鷹倉はさすがの名チャンピオンだった。足元すら覚束ない国元は鷹倉のラッシュを耐え抜けなかった。ロープに追い詰められ、強烈な右フックをまともにもらい、遂にこらえ切れず、今度は後ろに倒れこむようにダウンした。

「ああ……」

隣の立ち上がっているあずさが思わず顔を覆った。もう、駄目か！？ 勇也らだけでなく、会場のほとんど全ての人間がそう思った。が、国元は必死にロープに体ごと掴まって立とうとしている。負けてたまるか、と言う国元の声が聞こえるようだ。勇也はその姿に感動した。かろうじて立ち上がり、なんとファイティングポーズをとった。レフェリーが慎重にチェックをする。前に歩かせ、すつと来たのを見て、「ファイッ！」と再び試合を始めさせた。鷹倉は突進してきた。もう残り時間が三十秒ほどしかないからだ。二発、三発とグローブ越しにパンチを浴びせる。朦朧としていた国元にそれを凌ぐ力は残っていなかった。国元は右ストレートを出した。そして、そのまま前のめりにリングに倒れた。

レフェリーが大きく両手を上げて振った。リングにはタオルが投入されていた。試合は、国元の負けで終わった。試合終了のゴングが打ち鳴らされる。

勇也らはずっと立っていた。座る事は、戦い抜いた国元先輩に対する非礼に思われた。

やがて、セコンドの小磯トレーナーらの介抱で、国元は意識を取

り戻し、立ち上がると、歓喜に湧く鷹倉陣営に真っ先にあいさつに行った。ベルトを巻きなおしていた鷹倉は、それを後回しにして、まず国元と抱き合い、互いの健闘を称えあった。鷹倉は国元の右手を持つて、高く掲げ、観客も大歓声でそれに答えた。もちろん勇也らもう枯れつつある喉を震わしてそれに応じた。国元先輩が負けたのは悔しくて仕方ないが、鷹倉というボクサーも立派だ、と思った。その後、国元はリングから降り、鷹倉だけがカメラマンに写真を取られたりしていた。

勇也らは、試合後は自由解散と言われていたので、リング上から誰もいなくなつた頃に、四人で日本武道館を出た。

みな口数は少なく、しかし異常に興奮していた。それぞれ思うことがあった。勇也は、負けたとは言え国元先輩は格好よかった、と思った。と、同時に、勝負の世界の非情さも知った。誰もが勝てるわけじゃないんだ、そんな当たり前のことを考えていた。勝てるのは誰だ？それは『強い奴』だ。歯軋りしながらそんなことを考え続け、四人と別れ、やがて家路についた。

第十二話 秘密

吹く風が心持ち涼しくなってきた。暑かった夏は終わりを告げ、勇也たちのランニングも少しだけ楽になった。今日も、典史ら先輩と共に夢橋川沿いをひたすら走っている。その横にはママチャリに乗った高槻あずさもいた。勇也の脳裏に、昨日聞いた話が思わず甦ってくる。

「あずささんな、白井会長の家に住んでるんだってよ」

剛がロッカールームで小声でそう言った。そこにはいつもの四人しかない。

「そうなの？実家から出てるんだ」

邦治がＴシャツを脱ぎながら聞く。勇也も聞くでもなしに聞いていた。

「詳しく知らないけど、どうも親が離婚して二人ともどっか行っちゃったらしい」

剛が首を振りながら言う。

「それで遠縁の白井会長が引き取って、ここで働かせてるらしい」
吾郎が、あの人僕らと一緒にぐらいの年齢ですよ、と聞いた。

「んー、十六歳だから、吾郎と一緒にかな。邦治らは十七歳だから一個上じゃね」

「俺らと似たようなもんだな。高校も行かず、か」

邦治が言いながら顔をしかめた。なんとなく自分と重ねてしまったのだろう。勇也も不和な家庭に育っただけに、あずさの苦しみがなんとなく分かる気がした。

そつと、あずさの横顔を盗み見た。意志の強そうなその奥二重で、何を見て何を思ってきたのだろう。いつもどおり右側に寄せてくくられた茶色い髪が風にそよいでいる。何かを話してみたい、という

衝動に駆られた。しかし、一体どうすればいいのだろうか。恋愛経験ゼロな勇也は、煩悶しながら走り続けた。誰かに相談してみるか。だが、相棒の邦治は勇也に輪をかけたコワモテ野郎で、ずっとスキンヘッドにしていたような奴だ。女など寄ってくるはずもない。剛はどうだ。そう言えば、あいつはなんだかんだで結構もてそうだ。今斜め前を相変わらずの茶髪にシルバーアクセをジャラジャラさせて走っている。こいつなら、相談したら何か良い方法を教えてくれるかもしれない。だが、どうにも恥ずかしい。勇也は一人悶々としながら走っていた。

「おい剛よお」

ダッシュの後の休憩時に、勇也は隣に座って尋ねてみた。

「お前、彼女いるの？」

「いるよ？　なんだ急に」

額の汗をぬぐいながら問いかけてくる。

「いや、なんつーか、そういう方面に詳しいかな、と思って」

「はーん、まあ、人並み程度かな。女でも紹介して欲しいのか？」

言いながらニヤニヤしている。

「馬鹿、そんなんじゃないよ」

邦治は吾郎と二人でk-1の話に夢中になっている。剛はなんとなく分かったような顔をして、

「好きになったら即行動。明日には他の男に取られっちまうかも知れないぜ？」

などとわざと言って勇也を煽ってくる。そう言えば、恋人だっているのかもしれない。勇也はうつむいてしまった。それを見た剛は「協力してほしいか？」

と真顔で聞いてきた。思わず反射的に頷いてしまう。

「よし、じゃあ今度一度二人で飲みにも行くか、話聞かせてもらわないとな」

「じゃあ帰るよー」

典史の合図で全員立ち上がった。勇也は、目で同意して、走り始めた。

「なるほどね、確かにあの子は可愛いよ」

剛は鳥のから揚げにレモンをかけながら返事した。二日後、勇也のホテルの洗い場のバイトの無い火曜日の夜、二人で駅前の居酒屋に来ていた。二人とも未成年だが、そんなの関係ねえといわんばかりに生ビールをまず飲んだ。

「頼むから誰にも言うなよ。邦治にすらまだ言っていないんだ」

「なんでだ？あいつ連れじゃん」

勇也はため息をついて、隠す気もないけども、相談相手としてはまるで役に立たないのはお互いよく知ってるから、とぼやいた。高校時代、週末になれば族の集会にゲスト参加して木刀振り回してたんだから、と言うと剛は大笑いして、そりゃーもてないわ、と言った。

「ま、人になんか言うわけもないけど、さて、あれだけの器量の子、とつくにうちの誰かが手を出してそうだけだな」

「でも、もしそうなら俺らにも伝わってそうだけだな」

「あれだろ？白井会長の家に住んでるんだろ？怖いからじゃねーの」
確かに元世界王者でジムの創設者である白井会長は恐ろしい。威風堂々、ジムに来るだけで空気が変わる。腰に日本刀を差していても何の違和感も無いラストサムライだ。二人はそれを思い出して少し黙った。

「ウチの高月に手を出した奴はどいつじゃ！血へド吐かせてのた打ち回らせてやる！とかなるのかもよ」

「ぐわあ、恐ろしすぎる」

思わず勇也は声をあげた。しかし、だからと言って想いが消えてなくなるわけでもない。実際、最近はジムに行くとすぐその姿を探すようになっていた。いたらほっとすると言うか、気合が入って、その日の練習も勢いがつくのだった。

「とにかく、まず挨拶したり、会話することからかな。向こう、お前の事なんて一人の練習生ぐらいにしか思っていないぞ、今は」

「だろうな。挨拶、か」

二杯目の生中を飲みながら自問した。できるだろうか？

「俺もそれとなく身辺情報は探つといてやるから、ま、恋はあせらず、だ」

勇也はいい言葉だ、と思った。その一方、この前の言い分と違っ
じゃねえか、とも思ったが口には出さなかった。その後もかなり飲
んで、二人は大いに気持ちよくなって、肩を組んで歩いて帰ってい
った。

第十三話 K・O

次の日、勇也は緊張した面持ちで共英ジムに現れた。昨日の剛との話どおり、毎日あずさにあいさつをしよう、と決意したからだ。まずジムの入り口で大きな声で「おはようございまーす」と言う。これはいつものことだ。そして、更衣室に向かう。そのさなか、何気なく広いジム内を見渡す。既に多くの練習生が柔軟をしたりシャドーボクシングをしている。いないな、と思っていたら、更衣室の前ではったりあずさに出くわした。とつさの事で意表を突かれたが、その事だけ考えながら歩いてきた勇也は、なんとか「おはよう、ございます」と言えた。するとあずさも「おはようございます」と返した。余り練習生にあいさつされないからか、驚いた表情だった。あるいは、このヤンキー、案外礼儀正しいのね、などと思ったのかもしれない。ともかく、今日のノルマは果たしたぞ。勇也はそう思い、服を着替えた。だした。

「よし、準備はいいな、いつものように三分二ラウンドな」

今日の勇也の相手は、四回戦のプロボクサーの岡田貴一だ。スピードが速く、特にディフェンスの上手な選手だ。今日が二回目の対戦なので、ある程度は手の内は知っている。勇也はとにかく追いつけるように必死に動いた。

「岡田！ 逃げてばかりじゃ駄目だ」

レフェリーの武山が指示を出す。その通り、岡田はかわしてばかりで余り撃ってこない。アマチュアっぽいファイトスタイルだな、と典史が説明してくれたのを思い出す。早いジャブを必死に出すが、クリーンヒットしない。逆に岡田が左から右、と軽快に打ち込んできた。ここだ。勇也は思い切り踏み込んで相打ち覚悟で右ストレートを放つ。お互い顔に入った、と思ったが、勇也の打撃はブロックされていて、岡田の右は軽く当たった。チッ、と舌打ちして、勇也

は怯まず前に出た。とにかく俺にはこれしかねえ、と連打を放つ。
「ラウンドが終わった。」

「勇也、喜一の目線に気をつけてみな」

リング下から典史がアドバイスをしてきた。

「目線ですか」

「そう。知らず知らずのうちに、自分が回りたいほうを見るからね、アイツ」

なるほど、と思い、二ラウンド目は目線に気をつけることにした。ゴングが鳴る。少しずつ間合いを詰める。喜一はこちらのグローブを見ている。瞬間、チラッと左側を見たのが分かった。同時に、フットワークを使い、左に回った。なるほど、と勇也は思った。これなら、喜一の目線を見ていれば、次に向かう方向がわかる。じっと見ながら、前に出て打ち合う。お互い数発当たり、距離を取った。喜一が右を見た。ここだ！

勇也は思い切り踏み込んで左フックを放った。凄い手ごたえを感じた。喜一が視界から消えてゆく。

「ダウン！」

武山が宣告した。勇也は茫然とそこに立っていた。何が起こったのかよくわからなかった。武山に、コーナーに行け、と指で指されて従う。目の前で喜一がリングに寝転がっている。カウントはすぐに取りやめられた。完全なる失神KOだ。

「すげえぞ勇也！」

とリング下で邦治が叫んだ。プロボクサーから初めてダウンを奪った。しかもノックアウトだ。勇也は信じられない思いでいる。

「やっぱりな、当たったら凄いなと思ってたんだよ俺は」

と、喜一を介抱しながら武山が呟いていた。

「勇也、もう終わりだ、リング降りろ」

と言われて、勇也は素直にリングを降りた。邦治が満面の笑顔で待っていた。典史も拍手してくれた。グローブを外してもらいながら、これがノックアウトか、すげえ快感だ、と思っていた。

「ヘッドギア越しにダウンさせたのは凄いよ、自信もっていいよ」と、典史も嬉しそうだ。自分が教えている後輩が強くなったからだろう。

「自分でもびっくりしてます」

「ドンピシャのタイミングの左だったな、相手の動いた瞬間に入ってたぞ」

と、邦治が言う。リングの外で見ていたほうが、より客観的に見えるのだろう。

「そうか、いいタイミングだったのか」

勇也はまだ興奮冷めやらず、上気した頬でバンテージを外していた。

その興奮は、練習が終わった後、ホテルの皿洗いのバイトをしているときまで続いた。そのせいで皿を一枚、グラスも一個割ってしまった、上司に大目玉を食らってしまった。が、勇也はそれでも気分が良かった。曲がりなりにも相手はプロだ。それを、一撃でノックアウトできた、と思うと、また興奮してくるのだった。

「俺も早く相手をぶっ飛ばしてえぜ。ヘッドギアしてるから倒れないのかな」

帰り道の電車の中で、邦治がそうばやく。

「けどヘッドギア外したら、俺らが瞬殺されるんじゃないか？」

「それもそうだな、まあとにかく今日のお前は凄かったってこった」揺れる電車も、乗客の多さも気にせず、二人はひたすら今日のKOについてあれこれ語っていたのだった。

第十四話 感謝

少しだけ肌寒さを感じる頃になった、秋晴れの空の下を、勇也と邦治は今日もホテルのバイトへと向かっていた。駅を降りて、港に面したホテルヨークラまでは、5分ほど歩かなければいけない。大通りを行き、歩道橋を渡り終えた時、邦治が何かに気づいた。

「勇也、あれ」

と指さされたほうを見ると、六人ほどのチーマー風の男達が学生服の二人を囲い、狭い路地に入ろうとしていた。

「ん……ケンカすんのかな」

思わず勇也は昔のテンションに戻り、張り切って参加しようとした。が、すぐに打ち消した。俺はボクサーだ、ボクサーはケンカなんかしねえ、と。

「関係ない。なんならオマワリにでも電話するか？」

「そうか、無視するんだな、じゃあ俺だけ行くわ」

歩き出す邦治の肩を勇也は慌てて掴んだ。

「ケンカはもうしないって決めたろうが」

「ケンカじゃねーよ。俺はお前みたいに見て見ぬ振りはできねー性質^ちなだけだ」

ちっ、と勇也は舌打ちした。それはわかるが、相手は明らかにチンピラだ。殴り合いは避けられねーな、どうする……

勇也の迷いをよそに、邦治は余裕で路地に入っていく。すでに乱闘は始まっていた。が、衆寡敵せず、二人の学生服がいいようにやられていた。

「オラッ！ 集団で何弱い者イジメしてんだこらあ！」

邦治はそう言うなり一人の襟首を掴んで足をかけて倒した。

「んだてめえは！」

一人の金髪がいきなり殴りかかってきた。が、邦治は余裕でかわし、膝蹴りを入れた。勇也もそれを見て腹をくくった。と言うか、

どうやら邦治は「拳」を使わずにケンカするつもりらしい。それはそれでありかな、と勇也は思った。次に向かつてきた二人のうち一人を勇也は引き受け、いきなり前蹴りを放った後、前のめりになった相手の顔に膝を入れた。二人ともケンカなら高校時代に散々やった上に、今はひたすら体を鍛えているのだから、その辺のチーマーではまるで勝負にならなかった。あつと言う間に四人が伸びてしまったので、残った二人は怯えて逃げ出してしまった。

「おい、大丈夫か」

学生服の二人も何発か殴られたらしく、鼻血を出していたが、それ以外の怪我はしていなかった。

「すみません、ありがとうございました」

ちよつとだけ突っ張ったなりはしているものの、あくまで普通の高校生に見える。二人は何度も邦治と勇也にお礼を述べた。

「へっ、よせよ、ガラじゃねえ」

と邦治は照れてつつけんどんに言い、行こうぜ、と勇也に言い、その場を去った。

「これでいいんだろ、拳さえ使わなきゃあよ」

「ああ……そうだと思っぞ」

勇也はそう返事しながらも、不思議な気持ちを覚えていた。でも、その正体が何かはよくわからなかった。

バイトが始まり、運ばれてくる皿を洗い、残り物をこつそり口に入れながら、勇也はさっきの気持ちの正体を掴もうとした。そして、やがてわかった。感謝された事だ。それに違和感を感じていたんだ。今までのケンカは全部自分がやりたいからやっていた。誰かを助けようなんて思いは全く無かった。その違いか。となりの邦治はせつせと皿の上の残飯をゴミ箱に捨てては皿を巨大な洗浄機に並べている。こと義侠心で言えば、俺よりも邦治のほうがある。俺がケンカでやられていたら、必ず助けに来てくれた。これまで、それを当たり前に思っていたが、今日初めて、それは褒められるべき長所なの

だ、と勇也にはわかった。

「おい、なにしてんだ？ 次来てるぞ」

邦治に言われ、お、おうと返事して下げられてきた皿を運ぶ。だが考え事は続く。二人の高校生にお礼を言われた時、何かとても嬉しかったような、良い事をしたような実感があつた。これまでは人を助けるような真似をした事も無かつた。だが、今日のような思いが出来るのなら、それも悪くないな。もちろん、ケン力は出来るだけ避けるべきだが……。勇也は今日まで生きてきて初めて、人を助ける事の意味について考えていた。そして、連れである邦治の事を、人間的に尊敬する気持ちも芽生えていたのだつた。

夜家に帰って、布団に入ってから今日のことを思い出していた。あの二人の言葉を反芻して、一人ほくそ笑んだりして、慌てて何やってんだ俺、と自分に突っ込んでいた。ふと、今日のことを高月あずさに知ってもらいたい、と言うような気持ちになつた。何故だろう、かつこいい事したって褒めてほしいのか？ いや、そうじゃない。ただ、知って欲しいだけか。或いは認めてもらいたいのだろうか。勇也にはよく分からなかつたし、まさか自分から言うわけもないし、なんだろうな、この気持ち、と思いながら眠りについたのでつた。

第十五話 理由

勇也は、日曜日に朝からレンタルDVD店に行つて、色々な先輩に聞いたり、ボクシング雑誌で見たことのあるような、世界の名チャンピオンの試合集のDVDをしこたま借りてきて、胸を躍らせながら自分の部屋のテレビで見っていた。マイク・タイソン、モハメド・アリ、フロイド・メイウエザー・ジュニア、オスカー・デ・ラ・ホーヤ、シュガー・レイ・レナードなど、錚々たる名選手の試合は、どれも勇也にとって「生きた見本」以外何者でもなかった。

「うおおっ」

思わず声をあげた。タイソンの強烈なアッパーが相手を吹っ飛ばした。思わず勇也もアッパーを放った。その拳の小指のはじが角度悪くテレビと自分の間に置いてあった小さなテーブルの角に思い切り当たつて、勇也は一人悶絶した。家の中で無闇に拳を振り回すもんじゃない、と内心思ったが、勇也本人は気づいていなかった。自分のパンチ力が以前に比べて遥かに増している事を。その後も、むさぼるように名チャンピオンの試合を見続けた。見ながら、ふと勇也は思った。タイソンであれ、タイソンにK.Oされた相手選手であれ、彼らは何のために戦っているのだろう。選手達は命を懸けて体を張つてリングに上がっている。俺もそうになりたい、と思つている。原点を思い出す、と言ふべきか。勇也は、辰山譲の試合を見たい、と思つた。寝転がって、ぼんやりとボクシングを始めた頃の事を思い出していた。

「いいなあ、俺にも貸してくれよ、いくら払うからさ」

邦治は勇也が、昨日たくさんさんのボクシングのDVDを借りて見た、と言つ話を聞いてそう言つた。

「いいぞ。一週間レンタルだからな、今日の帰りに持っていけよ」

二人はいつも共英ジムの手前の夢橋川の上にかかっている一つの橋の上で待ち合わせしていた。

「やっぱりタイソンの試合は凄いわ。まず、相手のパンチをまずもらわないんだよ」

「打たれずに打つ、を実践してるわけだな」

「そう。小刻みに体を上下左右させながら、ヒュツと相手の懐に入っちゃうんだよ。あの踏み込みの速さは半端じゃねえ」

「しかも、タイソンってヘビー級の割には小柄なんだよな、小さいのに世界統一王者になったんだからなあ」

体の小さい者でも世界最強の王者になれる。この事は、勇也たち以外でも、数多くのボクシング少年達を密かに励まし続けてきた事だろう。二人も、胸のその思いを秘めて、今日も元気に挨拶し、共英ジムに入っていった。

「勇也、ちよつと来い」

剛が着替えた勇也をジムのはじっこに連れて行って、顔を寄せてきた。

「いい情報が手に入ったぞ、高月さんにはやはり彼氏はいないようだ」

「そうか、調べてくれたのか」

「そう、さり気に美樹さんに聞いたのさ。後な、これは微妙な情報だけど、ボクサーと付き合うのは嫌だ、と言っているらしい」

勇也はカナヅチで頭をガン、とやられた気がした。これでは夢も希望も無い。思わず唇を噛むと、

「まあ待て、希望を捨てるのは早い。大体、それが本心かどうかもわからないじゃないか」

「そうだけだよ……」

ふと、人の気配を感じ、二人は同時に振り向いた。そこには、床をモップかけしているあずさがいたので、思わず二人は飛び上がった。

「あら、驚かせてごめんなさい」

二人の様子が可笑しかったので、あずさは微笑みながら謝った。その様子なら、会話の内容は聞かれていないようだ。

「い、いや、大丈夫す」

剛が答えながら勇也の脇をつつく。目で、今日の挨拶は？と言っている。勇也も名前どおり勇気をふるった。

「おはようございます。あの、実は、俺ら、賭けを企んでたんです」しどろもどろになりながら、我ながら何を言ってたんだ、と思ったあずさは、このところ毎日挨拶してくれるこの練習生に興味を持っていたので、こう返した。

「賭けって、どんな賭けですか？」

モップを手に小首をかしげて聞いてくるあずさはとても愛らしかったので、勇也は思考停止に陥ってしまった。それを見た剛は、なんとかフォローせねば、と考えた。そこで勇也の代わりにこう答えた。

「あの、実は、年末にある亀山と内陶の世界戦、どっちが勝つか、ってジューズ一本賭けてたんですよ」

「ああ、なるほどです。私はじゃあ内陶に賭けたいな」

たった今3秒で考えた嘘ネタに乗ってきたあずさに、剛は内心焦ったが、これはむしろきっかけだ、と即座に利用する事を思いつき、「じゃあ、本当に賭けます？内陶が負けたら俺らにジューズ一本ずつですよ。その代わり、俺らは亀山が負けたら一本ずつジューズおごります」

「いいよ。だって亀山弱いよ、たぶん」

知らぬ間に亀山が勝つほうに賭けさせられた勇也は内心不満だったが、この成り行きを実はありがたく思っていた。話のきっかけが出来た、と思うと、機転の聞く剛に感謝せざるを得ないのだった。約束してあずさはモップをかけながら去っていった。すると、ボディーにドスンと一発入れられた。

「どんなもんだい。え？勇也。今日の帰りはジューズ一本おごって

もらうからな」

「ちえっ、わかったよ」

言いながら、ジューズ一本と言うのは相場としてどんなもんなんだろうか、などと思っていた。

「じゃあそろそろ行くよー」

との典史の声に、勇也も剛も返事して、元気よく共英ジムを飛び出した。

第十六話 賭け

勇也と邦治はピーナッツをかじり、缶ビールを飲みながら、勇也の部屋で、ボクシング世界ジュニアフライ級のタイトルマッチの始まりを待っていた。外は冷たい風が吹いて、窓を風が叩いている。

「んで、お前は亀山に賭けたことになってるわけだ」

邦治が二本目のスーパードライを開けながら言った。

「そうそう。俺は内陶を応援するけどな」

「剛の野郎、口が上手いんだな」

邦治はそう言って画面に映し出された亀山の顔にジャブを放った。

亀山は少し痛そうな顔をした。

「いよいよ因縁の対決が始まるな」

「内陶に王者の風格を見せて欲しいもんだぜ」

試合が始まった。一ラウンドから前に出たのは王者の内陶だ。亀山はステップを使って逃げる。そして、早くも激しい打ち合いになった。

「亀山の右が当たった」

勇也が言ったとたん、内陶がものすごい振り回しのボディーを亀山に当てた。一進一退だ。そうして四ラウンドまで来た時、動きがあった。亀山の頭が内陶の右の眉の上に当たった。

「今のわざとじゃねーか？」

と、邦治がスルメを口から飛ばして文句を言った。確かに、勇也にもそう見えた。内陶が出血した。会場からは壮絶なブーイングが沸き起こった。そのせいか、少し亀山が萎縮したように思える。

内陶は一ラウンドからペースが変わらない。もう三十四歳なのに凄いスタミナだ。ものすごい練習量なんだろうな、と勇也は思った。それだけでも尊敬に値する王者だ。王者ペースで試合は運ばれる。

八ラウンドが終わった時点で、レフェリーのジャッジが公表される。三人とも、三ポイントずつ内陶のリードだ。亀山は焦りだした

のか、不用意に飛び込んできて、内陶のカウンターをもらうようになった。亀山から鼻血が出た。足が動かなくなってきた。

「いけ！ 今だ、ラッシュラッシュ！」

邦治の叫びに応じて、内陶が亀山をロープに追い詰めてものすごい連打を浴びせた。フラフラになる亀山。惜しくもそこでゴングが鳴って、九ラウンドが終わった。

「しぶとい亀だぜ」

「こいつら一家ってタフはタフだよな」

その後も、内陶ペースで試合は進み、結果は判定になった。判定は五ポイントリードほどで、いずれも内陶につけた。

「よって、勝者、内陶大介！」

テレビにこちらにも聞こえてくるほどの大音量で勝者を讃える歓声が沸き起こった。一瞬、勇也はテレビのボリウムを下げたほどだ。亀山は一応挨拶をして、惨めにリングを去っていった。

「亀山一家の時代は終わったなあ」

邦治がそうばやいて、携帯をいじりだした。勇也は大いに満足して缶ビールを空にした。ふと思いついた。これで、高月あずさにジューズをおごらないといけなくなったな、と。立ち上がってカーテンを開けてみた。半月が美しく輝いていた。

「これ、負けた分っす」

今日の練習が始まる前に、剛と勇也はそれぞれ一本ずつジューズとコーヒーを備品室で作業しているあずさに手渡した。

「ああ、本当にくれるの。ね、言ったとおり亀山弱かったでしょう」

「そうですね」

「あの頭突きわざとでしょ。それでも負けるんだから本格的雑魚っすよ」

剛の言い方が面白かったのか、あずさはコロコロと笑った。本格的に弱かったんだ、とお腹を抱えている。勇也は、その様子がとても可愛らしい、と思ったのと同時に、気の効いたことの言える剛を

羨ましいと思った。

その場を離れ、それでも満足そうな勇也に、剛はハッパをかけた。今後は挨拶以上のことを話すんだぞ、と言われた。おう、とうなづきつつも、できるかな、と首を傾げていた。

「深く考えなくても、野郎と話すのと一緒の感覚でいいんだよ」

そう剛は言った後、ロッカールームへ消えていった。そうか、別に一緒にいいのか。そう考えると少し楽になった。よし、明日は何かを話そう。などと天井を睨みながら一人決意していると、背中をつつかれた。振り返るとあずさがいる。一瞬、夜中にトイレに行くときに幽霊に遭遇したみたいな顔をする勇也に、あずさはこう言った。

「京本クンって、やっぱりプロを目指しているんですか？」

「う、うん」

「磯部コーチがあいつは才能がある、って言ってたから頑張ってたね」と言っただけで、こり微笑んだ。勇也がろくに返事も出来ずにいると、事務室に歩いていった。勇也が石像みたいに突っ立っていると、剛がロッカールームから飛んできて、今何を話したのか聞いてきた。勇也は、ゆっくりと説明をはじめた。

第十七話 風邪

一気に冬が近づき、吹く風が肌を刺すように痛い。

「ちっ、もつと厚着してくるんだっとな」

「もうジャンパーとかコートを羽織る季節だなあ、クソ」

今日のアルバイトの皿洗いを終えた勇也と邦治は、かじかむ手をこすりながら帰宅した。

「ただいま」

と、勇也は小声で言っただアを閉めた。母の観月はもう勇也の生活パターンを知っているので、バイトの日は食事だけ作っておいて先に眠っている。食卓で食事を取り、沸かしてあるお風呂に入ったところ、今日の風呂の水は思ったよりぬるかったので、体を洗った後に気づいたのを後悔しながら、追い炊きをして、手持ち無沙汰にシャドーボクシングをした。そして、ゆっくりと浸かった後、体を拭きながら洗面台の鏡に自分を映してみた。腹筋は六つに割れている。明らかに体つきはこの半年で変わった。決してナルシストのつもりはないが、いい体になってきた、と勇也は一人ほくそ笑み、しかしいかにも不気味だな、と思いながら寝巻きに着替えた。豪快なくしゃみが出た。慌てて布団の中に飛び込んで眠った。

翌日も練習だが、どうも朝起きて以来気分が悪い。なに、病は気だけ、と自分に言い聞かせて、勇也は午後から共英ジムに出かけた。今日も日差しが弱くかなり冷え込んでいる。

「よし、今日も行くかうか」

典史の声を合図に、勇也達四人と、他のプロ志願の五人ほとんど一緒に走り出した。実はもう典史は新人の面倒を見る役目は終わっていたのだが、その人柄が自然と人を惹きつけるので、勇也らはロードワークの際はお供のごとく行動を共にしていて、典史もそれだいたいと思っっているようだった。横には不定期に自転車に乗った高月あ

ずさも来る。ダッシュのタイムを取りに来るか、特にやることがない時に来ているようだ。一度何故一緒に来るの、と勇也は聞いたことがある。

「ママチャリに乗って走るのもいい運動になるのよ」

とこっそりと教えてくれたものだ。ちなみに勇也は今日は一緒にくるかな、などと期待するのが常になっていた。来てくれない日はがっかりして、不思議と足も重くなるのだった。

夢橋川を山の方角へ向かってやや登り傾斜の川沿いのコースを走り、行き止まりまで来ると、そこにはかなり広いスペースがある。練習生はそこでダッシュをする。今日もみな必死に全力で走る。ゴール地点ではあずさがタイムウォッチを持って待っている。勇也もここぞとばかりに走り抜けた。何回か往復を繰り返すうち、勇也の気分が悪くなってきた。足元の大地がぐにゃと溶け、目の前の景色が緑色になったり赤く濁ったりした。あれ、と思ううち、勇也は前のめりに倒れそうになった。そこにはちょうど時間を計っているあずさがいた。

「あら？」

あずさの目の前で勇也がゆっくり崩れ落ちていく。慌ててあずさは抱きとめにいった。ところが、完全に勇也の体から力は抜けていて、あずさは支えきれず腰から座り込んでしまった。そのあずさに覆いかぶさるようにして勇也はダウンしまった。

「どうした！」

典史が駆けつけ、邦治らも周りを取り囲む。まさか勇也の奴、恋の余り暴走したのか、などと剛は一瞬思った。だが、仰向けに寝かせてみると、明らかに様子がおかしい。息は荒く、顔は紅潮している。

「そっぴや、勇也の奴、ちょっと風邪っぽいかもとか言ってみました」
邦治が言っと、典史は勇也のおでこに手のひらを当ててみた。

「なんだこりゃ！ ものすごい熱だぞ。よくこれで走ってたな！」

勇也はパクパクと口を動かし、やっぱ、風邪、すかね、と消え入るような声で言った。

「間違いないく風邪だよ。今すぐ病院に行かないと。どうしようか。おんぶして帰るか」

典史は自分が勇也を背負って帰ろうと思った。

「い、いや、それはないです。俺、歩いて帰ります」

勇也はなんとか上半身を起こして立ち上がった。しかし、そこまでが限界のようだ。

「大場さん、二人で私の自転車に乗って帰ればいいんじゃないですか？あれ、ニケツできますよ」

あずさの提案に、大場典史はなるほど、と言った後、

「じゃあ高月さん悪いけど帰りは歩いてくれる、ちょっと遠いけど」とお願いした。

「いいですよ」とあずさが快諾したので、典史はママチャリに乗って、フラフラの勇也を後部に乗せた、と言うより積んだ。

「嫌だろうけど、俺にしっかり？まってるよ、落ちるなよう」

「……がんばります」

こうして、典史らは先に帰っていった。そこで残ったメンツはとりあえず規定の量のダッシュを終えた。

「さて、帰りだけど」

剛が汗を拭きながら言った。

「高月さんは俺らのスピードについてこれないし、俺ら三人も一緒に歩こうぜ」

「おう、そうしようか」

邦治と吾郎も賛成したので、

「んじゃ、俺らは走るからよ」と他の練習生らは行ってしまった。剛には当然思惑がある。

「勇也の奴根性あるよなあ、熱でフラフラなのに全力疾走してたぜ」あずさを真ん中に、四人並びながら静かに光の差す静かな川沿いを歩いている。

「いきなり目の前で倒れるからびっくりしちゃった。支えようとしたんだけど、グンニヤリしてて無理だった」

あずさは言いながらも笑っている。機転の利かない邦治もここぞとツレのためにがんばった。

「あいつ、昔から『参った』って言わないんですよね。ケンカで負けそうになった時も絶対謝らなくて……」

剛はいかん、と思った。乱暴者だと思われたらマイナスかもしれない。が、手遅れだった。

「京本クンも君原クンも元ヤンなの？」

「え？え、いや、まあちょっとヤンチャしてたみたいなモンです」

剛は苦笑した。暴走族の集会に混じって大暴れしたくせに、ともちろん口には出さない。あずさと言うと、楽しそうに微笑んでいるので、大丈夫だったようだ。

「寒くなってきたもんねえ。みんなも風邪引かないでね」

邦治は、勇也の奴、いい子に惚れたもんだ、と思った。色白の整った横顔を見ながら、上手くいきやぁいいが、と親友の恋の未来を案じた。キューキュツ、と何かの鳥の鳴く声が聞こえる。川はどこまでも静かに美しく流れ続けていた。四人の遥か頭の上の青空を、燕が横切って飛んでいった。

第十八話 忘年会

街を冷たい風が吹きぬけ、年の瀬を迎えつつある。勇也と邦治が働いているホテルヨークラの入り口のところに巨大なクリスマスツリーが飾られ、点滅する華やかな電球が薄暗い夕方に目だって美しい。

「もうすぐクリスマスだなあ」

勇也が言うでもなく言ってみる。

「へっ、どうでもいいよ。この年になったら誰も何もくれないしよ。それよりさ、二十三日忘年会だな」

邦治が若干ふてぶてしく返事した。

「ああ、そうだったな。料理屋貸切りでやるらしいよ。うち人数多いもんな」

「俺ら未青年だから酒飲めないかな、そこじゃ」

「どさくさに紛れて飲めばいいんだよ」

そこで二人は声を上げて笑った。ふと、勇也は、そこにあずさも来るよな、と思いながら、ホテルヨークラの裏口の扉を開けた。

「首振って！ 止まってるから左もらうんだ！」

リングサイドから典史がアドバイスを叫ぶ。リング上では勇也が四回戦のプロボクサーと今日もスパーリングをしている。ちなみに、四回戦と言うのは、3分4ラウンド制で戦う、という意味で、六回戦なら6ラウンド、八回戦なら8ラウンド、と、強くなればなるほどラウンド数が上がっていくのだ。勇也ら練習生は2ラウンドまでしかやらせてもらえない。なぜなら、プロテスト自体2ラウンド制で、合格してはじめて4ラウンドの試合に出場することになるからだ。そこで、大体いつも勇也と邦治がセットで一人の四回戦ボクサーとスパーリングをしていた。ゴングが鳴った。勇也は相手に礼を言い、リングを降りて邦治にささやいた。

「常田くん今日はパンチに威力が無い、思い切って打ち合っているぜ」

「おう、サンキュ」

マウスピースを口にくわえながら邦治は言った。二人とも、スパ―を重ねるうちに、まずノックアウトされることはなくなった。むしろ、しばしば二人がダウンを奪う事のほうが多くなっていた。今も、邦治のほうが強打で押している。常田もプロだ、意地があるので練習生には負けたくない。が、リングの上では実力が全てだ。邦治の右フックが常田のあごを捉えた。ふらついたので武山はスタンディングダウンをとった。試合は続行され、常田はディフェンシブに試合を進めたので、邦治はKOは出来なかった。確実に二人は強くなっていた。武山は試合を見ながら、いつプロテストを受けさせるか、と時期を考えていたのだった。

共英ジムから電車で四駅程度の繁華街にある「料亭虎小屋」の大宴会場で、今まさに共英ジムの忘年会が開かれようとしている。広間にはラストサムライの白井会長、世界チャンピオンの辰山譲らに始まり、小磯トレーナー、武山トレーナー、そして勇也らまで、およそ150人もが集まって、座敷造りの部屋で長テーブルを囲んで、開催の挨拶を待っていた。静かになったところで、白井会長が悠然と立ち上がった。一人紋付の袴を着ている。さすがだ、と勇也は内心唸った。

「今年も良い一年だった。辰山も桜井もベルトを防衛したし、みなが切磋琢磨し技量を上げて、高い場所に登ろうとしていた。来年も同じ気概を持ってして一人ひとりが強くなれることを祈願して……」

そこで白井会長はビールジョッキを取った。全員、ビールやらウーロン茶やらの入ったグラスを掲げた。

「かんぱーい！」

150人の唱和が室内に響き渡り、賑やかな忘年会が始まった。大半は成年以上であるので当然酒を飲んでいる。しかも日頃は厳し

く節制しているので、酔いが回るのが早い。勇也ら新人は後ろの隅っこのほうにいたが、その盛り上がりになんか驚くほどだった。笑い声の聞こえない時は無く、俺は来年こそ日本チャンピオンになるぞー、と国元先輩は絶叫しているし、その声に呼応して俺もだー、俺は東洋太平洋だー、と言う叫びが響き渡り、始まって一時間も経たないのに、大盛り上がりといった感じである。

「ほれ、こっそり飲もうぜ」

どこからか剛がビール瓶を三本ほど持ってきた。勇也も舌なめずりしてそつとウーロン茶の入っていたグラスに注ぐ。そつと小磯たちのほうを眺めても、全く気づく様子もない。吾郎だけは飲まない。高い声で、僕は下戸なんです。などと言う。

「そう言わずにちよつとだけ飲んでみるよ」

少しばかり酔った邦治が強引に肩を組んで、俺の酒が飲めないのか、などとオヤジみたいなことを言っている。そして無理やりビールを飲まされた吾郎は、顔が真っ赤になって座布団を枕にして横になってしまい、剛らは大笑いして、今度は日本酒をこそこ飲め始めた。勇也が徳利から日本酒をグラスに注いで、さあ飲もうとしたとたん、前を歩く高月あずさと目が合った。あずさは勇也らのテーブルのところへ来た。ぶつ潰れている吾郎を発見し、目を丸くしながら言った。

「みんなおいしそうなのを飲んでるのねえ」

「あずささんも飲みなよ」

だいぶ酔ってきているらしい剛がへらへらしながらあずさにすすめた。あずさは日本酒の徳利に顔を近づけ、いやだ、臭いと言って断った。

その様子が、いかにも少女っぽかったので、三人は微笑まじさを感じて笑った。

「その代わり、お酌をしてあげるわよ。はい、勇也くん」

勇也の横にきちんと正座して、上品に徳利を傾けて、勇也のグラスになみなみと注いだ。

「嬉しいじゃん、勇也。男なら一気飲みだよな」

剛は煽りながら更なる酒を手に入れるために消えていった。邦治は上機嫌でいつき！いつき！などと手を叩いている。勇也があずさの顔を覗き込むと、嬉しそうに見つめている。よし、飲むか。それなりの大きさのグラスの中の日本酒を一気飲みした。胃袋から火でも吐けそうな勢いだ。

「俺らも混ぜてくれよ、一気飲み対決だろ」

後ろのテーブルの練習生たちも酒とグラスを持ってやってきた。

どうもあずさにお酌をしてもらいたいらしい。

「いいわよー、みんな私が注いであげるわよ」

あずさは面白がって次々とグラスに酒を満たし、誰も彼もに一気飲みをさせた。間が開くと勇也にも邦治にも剛にも飲ませ、自分は刺身だの天麩羅だのを頬ばっていたのだった。こりゃ絶対楽しんでるな、と剛は内心舌を巻いた。

「誰が一番お酒に強いのかしら。お酒に強い人はボクシングも強いんじゃない？」

横で聞いていた勇也はなんて事を言うんだ、とうなった。これじゃあ断れないじゃないか。そう思っていると、今度は邦治が焼酎のお湯割りなんて持ってきた。

「よし勇也。世界チャンピオンは焼酎ぐらい当然一気飲みだ」

と、理屈もへったくれも無いことを言う。だいぶ酔いが回っているらしい。横であずさが目を輝かせている。よく見ると、あずさの手にもビールのグラスがある。ははん、この子もだいぶ入ったのね、と勇也は納得し、焼酎を一気飲みした。剛と邦治が拍手して、また焼酎のグラスを渡してくる。

「ちよい待て。何で二杯連続で俺なんだよ。次は邦治だろ」

「え？あずさちゃん是谁が飲めばいいと思う？」

「そりゃー勇也くんでしょ。キャツキャツ」

と、手を叩いて笑っている。いつの間にか全員グルかよ。判断能力を失いつつある勇也はまた一気飲みした。世界がゆっくりと回り

始めた頃。武山の顔が見えた気がした。

「お前ら、酒はここまでだぞ」

どうも最初から知っていたらしい。ビール瓶を奪われ、あずさも元の席に帰っていった。勇也は思わず「ああ」と大きな声を上げた。あずさがゆつくりと振り返って微笑んだ。剛は、勇也の横に行つて密談を始めた。

「おい、まだ正気は残ってるな？大丈夫か？」

「かろうじて、な。クラクラしてっけど」

「後でよ、あずささんと言つてメルアドの交換でもしてこい。勢いでいけ」

「おう、勢いでか。ああ、大丈夫だ」

その後三人はお茶や水を飲んで酔いを醒ました。まともに電車に乗れるか不安だったからだ。大盛況の忘年会は、こうして終了した。大人は二次会に参加するようだが、勇也らは帰る。剛が隙をみてあずさを捕まえた。

「今日頑張った勇也がご褒美にメルアドを教えて欲しいそうぞ」

「一杯一気したんでお願いします」

「ああ、もちろんいいよお」

携帯を取り出し、赤外線通知の準備をはじめるあずさの言葉を剛は吟味していた。もちろんいい、か。今日も隣に長い事座つてたし、こいつはいけるのかもな。勇也は嬉しそうに携帯を取り出してメールアドレス交換をしている。そして、挨拶をして別れた。邦治は責任を持って豆タンク吾郎に肩を貸して待っていた。四人はそれぞれがそれぞれの思うところを考えながらも、楽しく帰途についた。

第十九話 親友

大晦日の夜を勇也は邦治の家で過ごしていた。邦治の家は下町の機械部品工場で、一階は広い作業場で、二階に住宅がある。邦治の部屋は比較的広く、今もかつての高校の同級生ら三人も集まっていた、年末恒例のDynamite!という格闘番組を見ながら、コンビニで買った年越しそばを食べていた。

「しかし、勇也も邦治もリングの上に立つ事になるんだろうなあ」
ロン毛を後ろでくくった戸嶋が言う。

「プロテストはまだ受けさせてもらえてないのか」
髪をワックスで爆発させている木下がそばの汁をすすりながら聞く。

「来年っつーか、まだ来年か。さすがに来年中には受けさせてもらえると思うけどさ。とにかくまだまだ、まだまだなんて言われて鍛えさせられるんだよな」

勇也がすこしだけ出来た拳ダコをさすりながら言う。もういけるだろう、という思いと、まだ無理かもしれない、が交錯している。

「おっし、とりあえず除夜の鐘聞きおわったら初詣だ。俺は、絵馬を書くぞ」

邦治が至極真面目な顔で言ったので全員受けた。

「絵馬って、お前そんなタマかよ」

茶髪をセンターで綺麗に分けた豊橋が笑いをこらえずに言う。邦治はすかさず腹を殴った

「馬鹿野郎、信じる者は救われる、だ」

その言葉でまた全員吹きだした。こうして、彼らの今年は終わりを告げるのだった。

年が開け、一月七日から練習がはじまった。勇也と邦治は熱心に元旦から自主トレをしていた。七日に共英ジムに初練習に行くと、

小磯総括トレーナーに小部屋に呼ばれた。

「明けましておめでとうさん。二人とも体調はいいか」

「はい、元気一杯です」「絶対調です」と二人は答えた。小磯は二人の体つきや目の輝きを見て頷いた。

「よし、じゃあお前ら三月にプロテスト受けよう。階級は今の通り。武山いわくは、今すぐ四回戦でデビューできるほどらしいから、怪我だけ気をつけて、調整していこう」

二人は顔を見合わせて、満面の笑みを浮かべ、拳を握り締めた。いよいよだ。絶対に受かってプロボクサーになってやる。俄然体に入力が入った。

「今後の練習は武山がきちんとメニュー組んでくれるから、その通りにやれ。何、100%受かるよ。ただし、夢にも油断すんな」
はい！ と元気な声をあげ、二人は更衣室に走った。

ロードワークを終え、シャドーやパンチングマシンの練習を終えた二人に、武山が声をかけてきた。

「今日、勇也と邦治で2Rのスパarringな」

二人は一瞬戸惑った。二人はまだ一度もリングで向かい合った事はなかった。

「僕ら、階級が一個違ってますけど」邦治が言ってみた。

「一個だけだろ。大して変わらんよ」

と返事して武山はニヤツと笑った。二人は唾を飲んだ。邦治とスパarringか……。勇也は複雑な心境になった。考えているうちに、二人のスパarringの時間になってしまった。

「お互い手抜くなよ。そんな奴はプロテスト受けさせないからな」
リングの上で武山がそんなむごい事を言う。ゴングが鳴り、二人は気持ちの整理のつかぬまま戦いはじめた。互いにジャブがヒットする。痛い。こいつこんな強いジャブ持ってるのか、とお互いに驚いた。邦治が沈み込みながら間合いを詰めて左フックを振ってきた。普段リングサイドで見ているので、お互いの手の内や動きはよ

く知っている。それに、仮想スパーならいくらでもやってきた。右でガードし、勇也も左のショートフックを返した。そのまま、接近戦になった。邦治と目が合う。邦治は本気だ。それが分かった瞬間、アップercutを入れた。下がるな、目を逸らすな、体で押し返して前に出る。勇也はそういった武山や典史の教えの通り、打撃を入れられても絶対に引かなかった。応戦し、リングの中央でひたすら拳を振った。ノーモーションで出した右ストレートがカウンターで入り、邦治は足を使い円を描きはじめた。そして、細かい左を鋭く突いてくる。勇也がパリングで防いでいると、体重をかけた重いワンツーが来た。さらに、踏み込んで左ボディーが来た。かろうじて体をずらして避け、クリンチに逃げた。

「ブレイク！」

武山が間に入って、二人を分けた時点でゴングが鳴った。1R終了だ。勇也はコーナーで息を整えながら、対角で同じように休憩している邦治の姿を見た。ふと、コイツとはいっからの友達なんだけ、と思った。確か小六くらいだよな。一緒の小中高だったわけだ。一回だけ殴り合いをした事もあった。中二の時に、邦治の貸してくれたゲームソフトを壊したんだ。け。ヘラヘラ謝る俺が殴られたんだ。お互い本気で、鼻血を出してとつくみあったなあ。どうやって仲直りしたか忘れたなあ……。

カーン、と音が響き渡り、次のラウンドがはじまった。お互い慎重に距離を取る。

「どうした、もうばてたか。そんなにプロになれんのか！」

武山が吠え、それを合図に二人は激しく打ち合った。もう、技術とかはどうでもよくなった。ただひたすら打ち合った。最初にダウンしたのは勇也だった。右フックが効いて、後ろに吹っ飛んだ。が、すぐに立ち上がった。そして、強烈な右のカウンターが当たり、邦治が膝をついた。だが、邦治も立ち上がり、最後は振り回すだけのパンチが飛び交い、試合終了のゴングが鳴った。

「よし、よくやった。リングを降りろ。まあ判定はドロ―だな」

と、武山が愉快そうに言った。二人は肩で息をしてリングを降りた。勇也のところにグローブを外した邦治が来た。

「おつ。大変だったな」

と言って歯を見せて笑い、右手を差し出してきた。がっちりと勇也は握手を返し、微笑んだ。

「もうやだね、お前とやるのは。大体階級が違っじゃねーかよ」

「文句は武山コーチに言ってくれ。でもお前力ウンター上手いな」

「まぐれだよ。無我夢中で手を出してただけだ」

そう言っ二人は笑った。お互いの実力を肌で知れた、と言うのはいい経験だった。この経験を元に、お互いにアドバイスが出来るだろうから。リングの上では豆タンク吾郎が足の速いボクサーとスパーをしている。追いかけるのに一苦労、と言った感じがだ。

「吾郎はまだ受けられないな」

「あいつは高校卒業してからって言ってたぞ」

勇也も邦治も高校を中退してしまっている。もう、戻れる道はない。

「後二ヶ月か」邦治が感慨深そうに言った。共英ジムに入門したのは昨年五月ごろだった。

「俺ら、もうちょいディフェンス練習したほうがいいかもな」

「全くだ。俺らの場合打たれずに打つじゃなくて打たれて打つになつてゐるからなあ」

二人は熱心に何を今後練習すればいいかを話しあい始めた。リングの上では吾郎が必死に相手を追いかけて拳を出していた。

第二十話 誘う！

剛は年末の忘年会以降色々と作戦を練っていた。メルアドの交換をし、ぼちぼちとメールをしていると言う勇也に対し、こまごまとアドバイスをしていた。しかし、聞いている限りではデートに誘うなど夢のまた夢だ。

「と言う事で相談があるわけだが」

と、家に呼んだ彼女の亜樹に相談を持ちかけた。

「ふーん、なるほどね。じゃあさ、ダブルデートってのはどう？」

「俺とお前と勇也とあずさちゃんか。勇也はいいだろうが、あの子来るかなあ？」

「どんな子なの？」

「風貌は可愛いと言うよりは綺麗な感じかな。後、普段は静かな感じ。ちと家庭に問題があったみたいで、養女みたいな感じでうちの白石会長の家に住んでる」

「ふむ……おお、いい事思いついたワタシ。来週カヨの誕生日パーティーするんじゃない？そこにまとめて連れておいで。人数は多いほうが楽しい、とか言えば来るよ。あの子パーティー好きだから3、40人ぐらい集めるらしいし。よし決まり」

と、剛の一つ上の年の大学生の亜樹はさっさと決めてしまった。

「そうだな、人数が多いほうが向こうも安心するか」

「あのね、そういう家庭愛に飢えている子はホームパーティーみたいなのがいいのよ、あったかいから」

なるほどな、と携帯を忙しく打っている彼女の顔を剛はしげしげと見つめたものだった。

「そういうことになったから、抜かりなく誘えよ」

ジムの更衣室で剛に小さな声で高月あずさを今度の日曜に誘えと言われた勇也は焦った。どうやって誘うんだ。

「ちょ、ちよつと待て。なんて言うの？」

「そのままでもいいじゃん。大人数が集まるパーティーだから剛にお賑やかしに來いって言われたんだ、と」

「全然知らない人だらけなんだろ。俺だけならいいけど、あの子来ないよきつと」

勇也の弱氣の虫に内心イラツと來た剛は、言うだけ言ってみろよ、断られて失う物がお前にあるのか、と少しキツイ口調で言った。そう言えば失う物などないな、とは勇也は思った。このことで関係が悪化すると思えない。よし、駄目元で行くか、と携帯を取り出した。剛がそれを見て、

「馬鹿かお前は。すぐそこにいるんだから直接口で言え」と言った。それもそうか、と思いなおし、着替えてあずさの姿を探した。ちよつと運よく、出口のところで自転車置き場のところに一人でいた。今日もロードワークに一緒に來るらしい。

「お、おはよう」明らかにいつもより不自然な口調だが、あずさは別に気にしていないようだ。

「おはよ。今日も寒いねー。早くロードワーク行こうよ。動けば暖まるし」

見ればジャージの下にだいぶ着込んでいるようで、ちよつとぬいぐるみっぽくなっている。その姿も愛らしいな、などと思っていたら、話題を出し損ねた。その内典史がやってきて、ロードワークが始まってしまった。剛が目線で言えたか？と聞いてきたので首を振ると、目を瞑った。例のように折り返し地点まで來てダツシュを切る前に、「今日中に言えよ。もう來週なんだぞ日程は」と期限を切られた。勇也はこわごわ頷いた。ジムに戻り、隙をうかがう。ジムは巨大で、常に4、50人ぐらいが練習している。その上あずさはどこにいるのかわからない。しょうがないので、練習を終えてからにする事にした。

最後のクールダウンを終え、十分汗を拭いてから着替えて、邦治

には事情を話し先に吾郎と二人で帰ってもらう。剛は見届け人兼サポーターとして一緒にいることにした。流れ上一緒にいてもおかしくない。ただ、自分を頼りにして欲しくない、と剛は思っていた。見た限り脈はある。だが、このヘタレ勇也がモゾモゾとしている限り先は無いと睨み、自立？をうながしているのだった。

「あそこにいるぞ。タオルたたんでる」

あずさは奥の部屋で洗濯した山ほどのタオルをせっせとたたんでいた。

「高月さん、あの、ちょっと話があるんだけど」

腹をくくった勇也が近づいて声をかけた。あずさは、なに？と言う柔らかい表情をした。

「あのね、今度人の誕生パーティーがあるんだけど一緒に行かない？」

後ろの剛は頭が痛くなった。説明が足りん。

「え？誰の？どひと？」

あずさはきょとんとして聞き返した。剛は後ろで思わず嘖いてしまった。

「いや、そうじゃなくて、ああそうだ、剛の彼女の友達の誕生日なんだって。そ、それで人は多いほうがいらしく、枯れ木も……なんだっけ」

剛もここまで聞いて助け船をようやく出した。出さないとたぶん勇也は沈む。

「んあ、要はね、その子は人を集めてホームパーティーとかするのが好きな子なのね。お金とかも無しでその日はケーキとか食べ放題だし、ほんと軽い気分であててくれたらな、って。今度の日曜日のお昼からなんだけど、おいでよ」

あずさはホームパーティーとケーキと言う言葉に反応した。

「行くのは、私と、勇也クンと、剛クンだけ？他のジムの人は？」

「いまのそこあずさちゃんにしか声かけてない。野郎に声かけたら一気に20人ぐらいくるじゃん、ウチなら」

あずさは声をあげて笑った。それから、勇也の顔を見て、何回か頷いてから、

「じゃあいいよ、行く。それで、何時にどこに行けばいいの？」

剛は内心ガッツポーズをした。勇也の表情は残念ながら見えない。「それ、今日決まるんだ。だから、今日の夜に勇也からメール打たせるから」

「うんわかった。楽しみにしてるね。私、ケーニヒスクローネのケーキが大好きなんだけど、あったらいいなあ」

剛の脳内に（日曜日は勇也にケーニヒスクローネのケーキを買って持って行かせる事）とインプットされた。二人は邪魔しちや悪いから、と言ってあいさつして帰った。あずさは微笑んで二人に手を振ってくれた。剛はようやく勇也の顔を見ることが出来た。なんと、締めまりなく口元が緩んで嬉しさをこらえられないでいる。剛は、のどが渴いたなあ、と言って、また勇也にコーヒーをおごらせるのだった。

第二十一話 誕生会

翌週の日曜日、勇也の家からすぐの友浦駅近くを勇也は一人で歩いていた。黒の皮ジャンに紺のジーンズ、茶色の革靴と服装はお洒落にきたつもりだが、今日の前にあるケーキ二ヒスクローネというケーキ屋に入るのに逡巡していた。店の中には店員も含めて女性しかない。そこへこんな風貌の若造に一人で入れと言うのか。だが、腕時計を見るともう余り時間が無い。勇也は思い切って飛び込んだ。

「いらつしゃいませ」

と、フリルのついたメイド服みたいな衣装の店員に声をかけられ、ドギマギとしながらガラスケースに見入る。なるほど、どれもおいしそうには見える。横文字風のケーキの名前はどれも意味が分からない。えい、知るか、と、五つほど適当に舌をかみそうになりながら告げ、それでもそれを手にした後は満足した感じで店を後にした。これであずさも喜んでくれればいいのだけでも、と思いながら待ち合わせの場所に向かった。

駅の改札の前には、黒の上品そうなコートに身を包んだ高槻あずさがいた。いつもと違い、長髪を綺麗になで下ろしていて、印象が違う。

「こんにちは、今日は暖かいね」

向こうのほうが気さくに声をかけてきて、勇也はウス、そうだね、などと返すのみだった。

「あ！ それもしかして」

紙袋をそのまま手に持っていたので、あっさり勇也の隠し玉はばれてしまった。

「そ、そう。ここのケーキ好きだって言ってたから、さ」

こわごわ返事をしながらあずさの顔をうかがう。よく見れば今日

は化粧もしているらしく、いつそう美人に見える。

「わーいやったね！ 嬉しいな」

満面の笑みで微笑む彼女を見つめ、勇也はもうこれだけでもいいや、等と欲の無い事を思うのだった。

遠く駅の柱の影にはそんな二人を見つめる剛と亜樹がいた。もちろんわざと遅刻する気なのである。

「普通に会話続いてる感じだな」

「いつそ放っておいて二人きりで来させようか」

「さすがにそれは言い訳がつかないな。あいつボクシング強いしな、怒らせると怖ええし」

さらにしばらく見ていると、勇也が携帯を取り出した。俺かな、と剛が携帯を取り出すと、すぐに鳴り出した。出て、もう着くからと言って、そつと柱の影から二人で出た。そして合流して、電車に乗り、目的地の駅まで四人で向かうのだった。

カヨ、と言う亜樹の友達の家は少々田舎ではあるが、確かに豪邸と呼べるものだった。敷地内には立派な庭があり、巨大なムク犬がうろちよるとしていた。

「可愛い」

とあずさは言ったが、勇也にはでけえ、と言う感想しか思いつかなかった。

「ねえ、フランダースの犬みたいで可愛いと思わない？」

と言われ、お、おう、そうだな、と返す勇也の背中を剛は軽く殴った。

家の中に案内されると、リビングはとても広く、そこに既に数十人が集まっている。剛でさえも、こりやすぎえな、と舌を巻いた。大きなテーブルが並び、バイキング風に様々な料理が並べられ、シヤンデリアなどにさまざまな色紙で作ったオブジェが飾られ、西洋風の趣向を凝らした飾りがあちこちにあるのだった。

「いらつしゃい、亜樹。今日は楽しんでいてね」

と、今日の主役であるカヨに挨拶された。そんな服はどこで買った、という花柄フリルのドレスのようなものをまとっている。顔立ちは純日本人的なだけに、いっそうアンバランスに写る。

「今日はありがとね、これ、一同よりの誕生日プレゼントよ」

亜樹は気が利くらしく、全員から、と言ってくれた。これで勇也らの体面も持つと言うものだ。

「それでは、西村加代子の20歳の誕生日を祝いまして、カンパイ！」

司会風のタキシードなど纏った男の声で、誕生パーティーが始まった。とは言え、やはり見知ったもの同士での会話が中心になるのだが、こう言ったパーティーは賑やかであればよいものだ。お腹の空いた勇也は、テーブルの上の料理をせっせと皿に取る。すると、その皿に剛が手をかけ、

「よし勇也。それをあずさちゃんに渡すんだ」とそつと言った。勇也は納得し、海老だの Pasta だのサラダを乗せた皿を、後ろの椅子に座つてもじもじとしているあずさのところを持っていった。

「ありがと。勇也クンって親切ね」

そんな事を言われ、いやあ、などと言って頭をかくのだった。そして自分の分をあらためて乗せ、二人仲良く椅子に座って食べるのだった。剛が気を利かし小さなテーブルを二人の前に置いてニヤリと笑った。

「おいしいね。家の人を作ったのかしら」

「どうなんだろう。でも暖かいから作ってたっばいな」

あずさが皿をテーブルに置いて、飲み物を二人分取って来た。勇也はお礼を言い、それを飲んだ。

「それでは、誕生日と言う事で、おめでとうソング大会をはじめます」

カラオケが始まった。ムードを盛り上げるために、カーテンが引

かれ、室内の照明は消されて暗くなった。一人がマイク片手にドリカムの未来予想図？を歌いだした。その他の人もそれぞれ相應しい曲を歌う。勇也はろくに歌謡曲を聞かないので、どの曲も知らなかったが、あずさの横で聞いているだけで、どれもいい曲に聞こえるのだった。やがてカラオケ大会は終わり、今度は二人組が前に進み、漫才をはじめた。これが思ったより面白い。

「だけどさ、何が怖いって、誘拐ほど怖いものはないですよ」

「そりゃ怖いと言つか困るよな」

「お前ちよつと刑事役やって。俺犯人役な」

「おう。おい！ 貴様。誘拐した子を返しやがれ」

「返して欲しいか。じゃあ身代金783円用意しろ」

「安いな！ そんなんだったらすぐ払うよ！ しかも中途半端な額だし」

「子供を返して欲しかったら今から言う場所に明日午後1時に来い」

「わ、わかった、で、どこなんだ」

「○×区にある警視庁の入り口のところだ」

「すぐ捕まるわアホ！」

「それでな、分かりやすいように服装を言っておく」

「おう、どんな格好で来るんだ？」

「上はピンクのジャケット、首には虹色のスカーフ、下は全裸、靴は黒のロングブーツだ」

「露出狂か！ 来るまでに捕まってしまうわ！ どうも、ありがとうございました」

これがかなり場の雰囲気盛り上げた。勇也も笑ったし、あずさもよく笑っていた。

「今の漫才結構面白かったね」

「なかなか才能があるな」と返事した。

それから引き出物の抽選会のようなものがあり、パーティー自体は楽しめる内容だった。あずさは、勇也の買ってきたケーキのう

ち、三個も食べてしまつて、勇也と剛を驚かせた。

「ごめんなさい。滅多に食べれないからつい……」

「全然いいよ。俺はそんなに甘いもの好きじゃないし」

「何かお返ししなきゃね。そうだ、もうすぐバレンタインだね。お返しにあげる」

と、あずさは少しはにかみながら言った。勇也の心臓はバクバク言い出した。あずさにバレンタイデーにチョコをもらえる？それはとても嬉しいことなのだとわかった。

「う、うん。期待して待つてるよ」

横で聞いていた剛は内心しめた、と思った。ここへ連れてきた甲斐があつたと言うものだ。もうそろそろ、俺のお役もごめんな、と思い今日の最後の作戦を二人に告げた。

「あのさ、この後パーティーは終わりなんだけど、さらに二次会があつてさ、俺と亜樹は車で移動するから、二人、道覚えてるよな、悪いけど二人で帰ってくれよな、ごめんな」

二人は戸惑いながらも、そういう事情なら、と頷いた。本当はそんなものないのだが、と剛は内心舌を出した。亜樹に事情を伝え、パーティーが終わった後、二人を門まで見送った。二人がそれなりに親しそくに歩いてゆく背中を見て、剛は茶髪をかき上げながら、俺っていい奴だよなあ、とつぶやくと、亜樹は、私もケルンのケーキが食べたいわあ、と言ったので、その後彼はケルンでケーキを買う羽目になったのだった。

第二十二話 限界

足に力が入らない。ロープにもたれて、必死に立ち続けることしか出来ない。返す右も自分で手打ちなのがわかる。不用意に手を出すと開いたガードの隙間から容赦ないパンチが飛んでくる。もう今6ラウンド目だ。勇也は絶対にダウンしたくなかった。息が切れ、時々視界すら効かなくなる。なんとかフットワークを使ってそこを逃げたが、相手はまだ2ラウンド目、そして4回戦のプロだ。普通に追いついてきて、早いワンツーからさらに強い左ストレートが飛んでくる。ガードしたグローブ越しの衝撃に脳が揺れるのを感じた。必死にジャブを返す。まだ、まだ終わらないのか？不用意に左の力のないジャブを打った。あっさりパリングされ、ボディーに重いパンチをもらった。腹にもらうと足が動かなくなり、その場に立ち尽くす形になって、丸くなって亀ガードをしているうちに、ようやくゴングが鳴った。勇也は耐え切れず座り込んだ。

「よし、勇也終わり。後はクールダウンして、着替えたら俺のところに来い」

返事も出来ず首だけ動かしてなんとかリングから降りた。リング下では邦治も覚悟を決めた顔をしている。そして、リングに駆け上がり、計6ラウンドを戦いはじめた。

プロテスト受験まであと一ヶ月足らず、勇也と邦治と剛と、後三人は最後の追い込みと言う事でこれまで以上に内容の濃い厳しいトレーニングをこなしていた。基本から丁寧に形を矯正され、ある程度出来てきた体も重点的に鍛えさせられた。特に首とボディーに集中していた。

「プロテストはダウンしたらもう駄目。まず最後まで立ってないといかん」

などと言って武山は邦治の腹の上に立つ。

「うぐーっ」と悲鳴を上げながら邦治は腹筋をさせられた。横では剛が豆タンク吾郎に乗られて死んでいる。勇也の上にも他の練習生が乗っていた。

「次にスタミナ。走って走って走りまくれ」

ロードワークのコースが少し変わり、ジム周辺を遠回りしてから夢橋川へ戻るというコースになった。

「お互いをおんぶして走れ」

互いをおんぶしてダッシュさせられた。これは効いた。と言うか、ダッシュにならない。膝が笑い出す。

「吾郎のヴォケ！ もっと体重落とせ」と剛が思わず吠えた。吾郎は高い声で「すいません」と言っていた。

大概疲れてジムに帰ると、筋トレ縄跳びはもちろん、シャドー、ミット打ち、サンドバック叩きまでフルコースをこなし、気力も体力も限界まで追い込まれてから、スパーリングをさせられた。今も邦治は必死に長いラウンドを戦っている。

「ワンツーきっちり！ 後ガード！ この二つ見られるんだぞ、プロテストは！」

邦治も頭ではわかつてはいるのだが、体が動かないのだ。鉛をつけたようにからだのそれぞれの部分が重い。いいように相手に打たれてしまう。

「ほらどうした！ 動くサンドバックかお前は！」

その言葉に邦治はカチンと来た。怒りを燃料にして重いフックを返した。そうして、なんとか全てのラウンドを終え、リング下に転がり落ちて休憩した。

「ほれ、これ書いて来い。俺がサインと捺印して日本プロボクシング協会に提出するから」

と、武山は着替え終わった練習生全員に書類を配った。ここはジムの中の会議室のような場所だ。

「後な、来週コミッションドクターに健康診断してもらっから。まあ全員心配はいらんだろ」

武山はチラッと剛を見て、

「おまえエイズなんて持っていないだろうな。エイズじゃプロボクサーになれんぞ」

「そんなもん持ってないっすよ！」

武山も一同も口を開けて笑った。その後、武山はそれぞれに一冊の本とコピーした結構分厚い冊子を渡した。

「これ筆記テストの問題集と過去問な。まあ難しくない。これで落ちるような奴は小学校からやり直して来い」

勇也はパラパラとめくってみた。案外知らない専門用語がある。

うわ、覚えねば、と焦った。なにしろ暗記だのは大の苦手だ。横の邦治も眉をへの字にして唸っている。

「あとな、お前ら未成年ばっかだから、親の承諾書がいるから。これに書いてもらってきて」

と一枚の宣誓書らしき物をもらった。勇也は、母にいいよ夢を話さねばならないのか、と覚悟した。後ろめたいところは何も無い。今俺は全力で目標に向かっている。話せる、と確信した。

その夜、その宣誓書を母の観月に見せた。もう薄々はわかっていて。このところは、親子の会話も普通にあったし、勇也がボクシングの話をする時は目が輝いていたからだ。

「お母さんでいいのかしら。お父さんをお願いする方法もあるけど

……」

「オヤジの話なんかすんな。お前でいいんだよ」

「プロボクサーになれるの？」

「なるよ。黙ってみてればいいんだよ」

勇也にはもちろんまだ想像もつかない。お腹を痛めて産んだ我が子をどれほど母親が愛しているのかを。みすみす危険なリングの上に上げたくないのを。観月はサインした。勇也は、鼻をこすって立

ち去り際、こう言った。

「プロボクサーになつたら勝つて勝つて勝ちまくつてファイトマネー稼ぎまくつてよ、いい生活させてやるから待ってるよなあ」

観月はその言葉に心を打たれた。そんな優しい言葉をかけてくれたのはいつ以来の事だろうか。彼女の知らないうちに、彼は大きく、しかも正しい方向へ成長していたのだった。観月は彼の姿が部屋に消えるまで、ずっとその背中を見つめていた。それから、彼の無事と成功を密かに神に祈るのだった。

第二十三話 粉雪

冬は容赦なく寒さに沈み込み、通り過ぎる風が誰をも凍えさせる。今日は、2月14日。勇也は努めて平静を装いながらジムへやってきた。今日も当然プロテストへ向けての追い込みなのだが、それだけの日ではないのだ。邦治と共に中へ入ると、美樹とあずさがせつせと大きな紙袋から箱を取り出しては練習生たちに配っている。男の園であるボクシングジムには正直もてそうもないのも多く、大喜びでその義理チョコをもらってみなロッカー室に大事そうにしまいに行っている。美樹の目に二人も入った。

「はい、今日はバレンタインデーよ。これで来月のプロテストもばっちりね！」

「ありがとうございます、絶対受かりますよ、ははは」

邦治がさつさと受け取ってニヤついている。勇也にも同じように美樹の手から渡された。あずさはそこでただ微笑んでいるだけだ。そして二人は次の渡す相手を探して去っていった。

勇也の手元には質素だがきちんと包装された青色の箱が残った。

邦治は先にロッカー室に歩いていく。

……これだけ？

勇也は激しく落胆した。もっと、こんな配るようなものじゃなく、きちんとしたものをあずさの手からもらえと思っていたのに。いや、待てよ、後から別に渡してもらえるのかもしれない。と、とにかく希望を見つけ、練習に身を入れる事にした。しかし、不安は消えない。今日は自転車で併走もしてくれないようだ。白い息を吐いて走りながら、あの子は嘘をつくだろうか、と考えた。一ヶ月ほどの前のデートと言えるか微妙な日。あの時、彼女は言った。ケーキのお礼にチョコをあげる、と。ただの社交辞令と言うやつだったのだろうか。勇也は大きく頭を振った。こんな事をウジウジ考えるのは俺じゃない。もうプロテストまで三週間切ってるんだ。しかし、

それでもなお、頭の隅にあずさの言葉が甦るのだった。

スパarringが始まった。長いラウンドを戦うのにもほんの少し慣れてきた。ペース配分を考えずにガムシヤラにやると絶対に後半持たない。それより、1ラウンドずつ少しずつ残った体力を配分するようにすれば、6ラウンド目に棒立ちにならなくて済むとわかった。これは将来にも生きる知恵かも知れない、と勇也と邦治は帰り道に話していたのだった。今日は、つまりほんの少しだけリングの上で余裕があった。ふと、ラウンド間の休憩、インターバルの時、視線を感じ取った。誰だろう、かなりじつと見つめているな。視線の先にはあずさがいた。こっちにVサインなど送っていた。どういう意味だ？勇也の頭は嬉しさと恥ずかしさに混乱した。そしてラウンドが始まっていきなり右をまともに食らってダウンした。武山は怒鳴った。

「試合の最中にぼうつとする奴があるか！」

勇也はなんとか立ち上がったものの、その後もダメージが引かずいいとこなしで終わったのだった。

リングを降りたが、あずさの姿は見えない。もういいや、どうでも、と思つて、ストレッチをしてロッカールームへ行った。ふと見ると、携帯にメールが来ている。誰だろう、と思つてみるとあずさからである。光の速さで開封すると、

練習お疲れ様 今日夜7時に夢橋川小学校の横の
セブンイレブンの前で待ってるから来てね ♪

あずさは勇也のアルバイトの始まる時間をもちろん知らないし、勇也も教えていないし、今日のアルバイトに定時に行く気ももはや全くない。なんなら休んでもいいぐらいだ。突如顔を上気させているツレを見て、なんとなく悟った隣で着替えていた邦治は、

「なんだ、呼び出されたのかよ。バイト先にはうまい事言っというやるぜ」と言った。

「よくわかったな、何も言っていないのに」

「顔に書いてあらあ。へっ、昔はどこそこ高校の頭とかに呼び出されてたのになあ、はははっ」

勇也もちげえねえや、と言つて邦治の背中を叩いた。んじゃ俺は先行つとくから、お前は腹が痛くて遅刻、ってことにしといてやんよ、と告げて邦治は出て行つた。その横では剛がうむうむ、と頷いていた。

「なんだよその頷きはよ」

「大体の事はわかったからさ。一緒に飯でも食いに行けよ、ついでに」

「そこまではな……バイトに行くのは行くつもりだし」

「ならまた別の日……ホワイトデーのお返しとかだな」

なるほど、と勇也は頷いた。まだ少し時間があるが、剛も吾郎も帰るので、一人になった勇也は6時過ぎにはコンビニに到着してしまった。仕方ないのでひたすらコンビニの中で週刊誌や漫画を立ち読みしていた。そして、今まで味わった事のない独特の幸福感を味わっていた。自分が想いを寄せている人が、自分だけに会うためにやってきてくれる。早く来ないかな、と外を見るとつくに真っ暗で、そこに締まらないニヤケ顔の奴がいるな、と思つたらそれはガラスに映つた勇也の顔だった。慌てて引き締め、キリッとしていると、向こうから赤いダッフルコートを着た女の子が来た。飛び出そうとしたが、見られたら格好悪いのでわざと悠然と出た。

「ごめんなさい！ 待ってたでしょ」

手には綺麗な白い紙袋を持っている。

「全然待つてないよ」

軽く一時間は待った勇也は嘘をついた。

「はいこれ。あの日のケーニヒスクローネのケーキは本当においしかったよ」

あずさから渡された紙袋は少しだけ重たかった。

「義理でもあずさちゃんからチョコがもらえるんだから買った甲斐があったよ」

勇也は自分でも意外だった。こんなスマートな台詞が言えるとは剛の教育の成果か？

「今日さ、最初にジムに入ってきた時に配ってるチョコあげたですよ。その時勇也くん滅茶苦茶寂しそうな顔したんだよね。それで、私、今日のことメールするの忘れてたんだ、て気づいたの」

勇也は照れくさくなって顔を叩いた。そんなに表情に出してたのか。

「う、ん、実は、すんげえがっかりした。くれるって言ってたのに、って練習中も思ってた」

あずさはやっぱりね、と楽しそうに笑った。会話は途切れ、二人はふと見つめあった。

「もうすぐだね、プロテスト」

「ああ、もうすぐだ。絶対受かるから応援してくれよな」

あずさはもちろん、と言った。その頭の上に、白い粉が降ってきた。

「あ！……雪よ、スノウバレンタインだわ」

真っ暗な空から結構な勢いで粉雪が舞い降りてきた。

「きれい。ほら、川の向こうの家の光がいつそう輝いて見える」

二人はコンビ二の前を離れ、夢橋川の陸橋の欄干に並んで景色を見つめた。降りてくる白い雪が、家々の光が紡ぐネオンを一層幻想的に見せていた。しばし二人はその光景を眺めていたが、頭に雪が降り積もるので寒くなってきた。勇也はあずさの頭の雪をそっとはいたいた。

「風邪引いちゃまずいから、帰ろうか」

「うん、そうだね」

あずさは少々名残惜しそうだったが、うなずいて帰ろうとした。
「俺、送るよ。暗いし一人じゃ危ない」

「え、別に大丈夫だよ」

しかし、既に陽は落ち真っ暗で、降る雪のせいで視界も悪い事に
あずさは気づいた。

「……やっぱりお願いします。ボクサーが護衛なら安心だし」

「おうともよ。誰が来ても殴り倒してやるぜ」

そう言っ二人は声を上げて笑い、それからも色々な話をしながら
歩いた。だが、勇也は途中であずさがあの白井会長の家に住んで
いることを思い出し、違う意味で寒さを感じたので、ごくごく近所
まで送って即座に離脱し、遅刻しまくりのホテルの皿洗いのバイト
に向かうのだった。

第二十四話 プロテストの日 前編

小鳥のさえずる声が微かに聞こえる。勇也は目覚ましもなしに朝6時に目覚めた。ちよつと早いので、もう少しと思ったが、今日がその日だと思ったらもう興奮してしまつて目をつぶっていられない。がばつと跳ね起き、背筋を伸ばした。体調は万全だ。テレビをつけ、ニュースを聞きながら今日の準備をもう一度確認する。全て揃っている。天気予報、今日は快晴とのこと。

午前中の小春日和の中、勇也は邦治と待ち合わせの場所へ少々大きめのカバンを持って向かった。いよいよ今日だ、と思うと緊張してまだ胸が痛い。

「おはよ。どうよ、昨日寝れたか？」

邦治の表情を見る限り、余り眠れなかったらしい。

「俺ぐつすり寝たぞ。お前駄目だったのかよ」

「ああ、寝るんだけどすぐ起きちまうんだよ。夢で見るんだ、発表の掲示板に俺の名前がないってのをよ」

「逆夢ってやつだ。俺らが落ちるなんてありえん」

「ああ、そうだよな」

とか話しながらも、要は勇也も自分に暗示をかけているに過ぎないのだった。

午前中にジムに来るのは珍しい。案の定、ほとんど誰もいない。「ウス。いよいよだな。なんだよ、二人とも真っ青な顔しやがつて」いつも飄々としている剛が笑いながら出迎える。そう言いつつも剛も何度も唾を飲み込んでいる。後三人、一緒にプロテストを受けに行く練習生が来ている。そこへいつもと違いスーツを着用した武山も来た。いかつい黒のダブルのスーツなので外見は暴力団幹部そのものだ。おまけに頭はパンチパーマだし、背も高いしで、ある意味で勇也らが心から頼りに出来る存在なのだった。

「よし、最低限体を暖めていかないと。まあ向こうでも準備運動は出来るけどな」

と言う事で、少し早めに集合したわけだ。テストは昼からだ、後拓園ホールまで出ねばならないので、電車で一時間ぐらいは揺られないといけない。着替えて、準備運動からシャドー、軽くサンドバッグ打ちなどをした。

「よし、行くか。忘れ物すんなよ」

こうして武山と練習生六人はいよいよプロテストを受けに出発した。空には太陽が眩しく、勇也は元気が出てきた。

「武者震いするなあ」

「お前らそれよりちゃんと勉強してきたんだろうな？1オンスは何グラムだ？」

「28・35グラムです」勇也がさつと答えた。

「リングの広さの規定は？」

「18-24フィート」邦治が応じる。

「ふん、まあ大丈夫だな」

勇也らは駅に着き、特急に乗り込み、しばし問題集などを眺めて復習した。武山の風貌が怖すぎるので周りに人がいなくてちょうどよい。練習生の一人が真っ青な顔をしている。緊張の極限なのだろう。剛がいつもどおりにやりやいいんだよ、とガムを噛みながら軽口を叩いている。剛はボクシングセンスの塊みたいな奴なので余裕なのだろう。勇也はなるべく本番まで無念無想でいようとひたすらルールブックを読んでいた。やがて、一同は目的の駅に着いた。徒歩一分、駅を出てすぐのところに後拓園ホールがあった。外見はショッピングモールに見えない事もない感じだ。

「思ったよりきれいだな」邦治が呟いた。

「歴史と伝統のあるホールのリングに立てるんだから喜べ」

武山はすっかり勝手を知っているようで、ずいずいと入っていく。受付嬢が明らかに怯えていた。大きな会議室のような場所に着いた。

入り口に「JBC プロテスト会場」と紙が貼っており、それを見たたん勇也の緊張の度合いが頂点に達した。中に入ると、5、60人は人がいた。こいつら全部か、と邦治も嬉しいような複雑な気持ちになった。同じ試験を受ける仲間がいた、と言う感覚だ。

「俺に書類渡せ。んで、点呼されてから席について、まず筆記試験だ」

と言うと、武山は提出書類を持ってどこかへ行ってしまった。少し不安を感じたが、共英だけでも6人いるのでよかった。一人だったらもつときつかったかな、と勇也は感じた。他のテスト生を見つめる。チンピラ崩れみたいなのもいれば、真面目そうなものもいる。別にどいつも強そうに見えないぜ、と勇也は鼻息を荒くしていた。そのうちに、点呼が始まり、それぞれ席に着く。同じジム同士がやはり近い。

「おはようございます、みなさん。それではこれより20xx年三年度のプロテストの筆記試験を行います。」

と、眼鏡をかけた真面目そうな男が宣言し、筆記試験が始まったが、テキスト丸暗記の気合で勉強してきた勇也には全く簡単な物だった。あつという間に終わった。隣席の剛など落書きをしては消している。そして、時間が来て、筆記試験は終わった。

「それでは次は実技試験に移ります。みなさんそれぞれ移動していただいで、準備をお願いします」

いよいよか。勇也は緊張を感じたが、むしろそれと戦う事の密かな喜びを感じはじめていた。俺は、誰にも負けねえ。ボクシングをはじめた頃の、或いはやりたいと思っていた頃の気持ちを取り戻していた。全部出すんだ。俺のこの一年ほどの汗と努力の成果を。柔軟体操をし、少しダッシュをし、静かにバンテージを巻き、リングシューズの紐を丁寧に結ぶ。そしてお互いにグローブをはめ合い、後の者は武山に結んでもらい、簡単にミット打ちをした。それぞれ

の選手の準備は終わった。後は、順に呼ばれたらリングに上がるだけだ。勇也はマウスピースをくわえながら、初めて照明に照らされるリングと言うものを見た。あそこが、俺の戦う場所だ。怖さも、体の震えも無かった。

「共英ジム、毛利剛くん」

剛が呼ばれた。はいっと元氣よく返事をした。勇也、邦治ら全員とグローブを合わせてリングに上がった。あいつの神経の太さは流石だ、と誰もが思った。相手も同じくバンタム級なので小さいが、よく鍛えられて引き締まった体をしている。武山がセコンドについた。プロテストは2R2分30秒のルールだ。

「動いて、ジャブからワンツーな。無理に打ち合うな」「はい」ゴングが鳴った。剛は、最初わざと足を使って、自分の体をリズムに乗せた。相手は教科書どおりのジャブとすり足で距離を詰めてくる。体をかなりウィービングで小刻みに揺すっている。剛はゆっくりと動いていたが、突然リズムを変えて相手との距離を詰めた。そして、パパーンとワンツーを放った。不意の左は相手の顔を捉えた。すぐに相手も右を返したが、その時剛はもう距離を外していた。典型的なヒットアンドアウェイだ。剛は同じようにフットワークを上手に使い、ほとんど相手を寄せ付けずに的確にパンチを当てて試合を終えた。

「よしよしよくやった、練習通りの動きが出来たな」

武山がそう褒めて、二人で戻ってきた。勇也らは軽く声をかけようとして息を吞んだ。全身汗をかい、疲労仕切った表情をしている。

「見てたか、余裕だったろ」とことさら余裕を見せようとしたが、この2ラウンドでかなりタフな剛がばてたのがわかった。やっぱ、違うんだな。勇也も邦治もますます気合を入れた。次に呼ばれたのは別の練習生で、そしてしばらくして邦治が呼ばれた。

「行つてくらあ」

邦治は冷静な声でそう言って、みなにグローブをバシバシ当ててリングに昇っていった。邦治の相手は金髪のスーツ刈りの男だった。ケンカさながらに睨みつけてくる。並みのテスト生なら怯えたかもしれないが、邦治にそんなものは全く無かった。試合が始まった。邦治は力まず焦らず無難な立ち上がりだ。ところが、どうも相手も同じタイプのファイターらしく、手が合う感じた。

「似てるな、あの二人のスタイル」

「そうだな、かみ合ってるな」

相打ちが多く、互いにダメージがある展開で1Rが終わった。だが、邦治の目は全く死んでいない。むしろ嬉しそうに見える。別にプロテストは勝たないといけないわけではないし、相手をKOしないといけないわけでもない。邦治は実際、強い相手と戦える事を喜んでいたので。そして2ラウンド目、必死で余裕の無い者と、試合を楽しんでいた者で差が出て、邦治のアッパーがまともにあごに入り、相手はふらついて膝をついてしまった。

「ダウン！」

カウントが始まるが、金髪は根性を見せて立ち上がって、全力で打ち込んできた。邦治も相手の背水の攻撃に押され、コーナーに詰められたところで試合は終わった。

「サンキューな」

「おう、ありがとう」

拳を交えたもの同士、健闘を称えあってリングを下りた。

「最高だったな。絶対受かったぜ」勇也は最大級の賛辞を送った。

邦治も汗を垂れ流して言った。

「俺わかったわ。リングの上は照明で暑いんだ。覚悟しとけ」

「おう」

そしてさらに共英の練習生らがリングに上がり、最後は勇也一人になった。それでも勇也は落ち着いていた。受けるべきものを受けると、と言う自然な気持ちだった。

「次、共英ジム、京本勇也くん」

「はい！」とひととき大きな声を上げ、勇也はマウスピースをしっ
かりくわえ込んで、その場所へ向かった。

第二十四話 プロテストの日 後編

勇也はシューズにワセリンを染み込ませ、一気に階段を上りリング内へ入った。なるほど、確かに熱いな。横には武山も来た。対戦相手を見据える。長髪で随分目つきの悪い男だ。

「手を出せ。ガードに気をつける。それだけでいい」

武山はそつと勇也に話してリングを出た。対戦相手は一度も勇也から目線を離さなかったし、勇也も睨み続けた。

カーン。高らかにゴングが鳴った。勇也はすぐに間合いを詰めようとした。ところが、何か勝手が違う。

「相手、サウスポーかよ」邦治がうなった。

「勇也、ほとんどサウスポーと試合した事ないぞ。ウチの4回戦には一人しかいねえ」

勇也はとにかく手数だ、とジャブを打つ。相手もジャブを打ってくる。その出てくる位置がいつもの感覚と微妙に違う。戸惑っている勇也を尻目に、長髪は左ストレートをボディに当ててきた。

「勇也！ 踏み込んで打て。近づけば一緒だ！」

武山が叫んだ。なるほど、と勇也は思い、ガードを固めて思い切つて飛び込んだ。すると、相手はすぐにクリンチに来た。振りほどこうとしてもなかなか離れない。ようやくレフェリーが離し、また勇也は一気に飛び込んで、つかまれる前に左右のフックを放った。ガード越しでも手ごたえを感じる。相手の拳の位置を常に確認しながら打った。長髪は体ごと押して距離を取って逃げた。また勇也は追い、何発か当てる。そういう展開が続いたが、なかなか有効打が取れない。それに相手はリーチも長く、走らせるジャブが邪魔になる。勇也の思うようにいかないまま、1Rが終わった。

「サウスポーってやりにくいですね」

インターバルでイスに座るなり勇也は言った。

「そうだなあ。くそつ、もうちょつとお前らにサウスポーとスパイ

させておけばよかった」

武山は自分のせいだといわんばかりに髪をかきむしった。サウスポー対策は口ですぐに言って分かるようなものではないのだ。

「今までやってきた事、全部思い出してぶつけて来い」

それしか言えなかったが、勇也は元氣良く飛び出して行った。最後のラウンドだ、大暴れしてやる。勇也はどんどん手を出した。教わったパンチを全て出した。長髪も必死に交わし、逃げ、打った。だが、なかなか捕まえきれない。勇也はわざと止まってみた。長髪がいぶかしそうに警戒しながらジヤブを打ってきた。何発も見ただ、大体の軌道はわかってきていた。勇也はすつと沈んで、斜め下から右のフックを放った。ものすごい手ごたえで、相手が吹っ飛んだ。

「ナイスだ勇也！」

邦治が大声で叫んだ。レフェリーは即座に手を交差させた。カンカンカンカンカン。ゴングが打ち鳴らされる。レフェリーが勝者、と言いながら勇也の右腕を高く掲げた。気持ちいいじゃねえか。勇也はカタルシスを感じていた。ここが、俺のこれからの場所だ、と勇也は確信していた。

一週間後、共英ジムの掲示板にプロテスト合格者が張り出された。その日にJBCが発表したものを印刷したものだ。そこには、京本勇也、君原邦治、毛利剛の名前があった。勇也は掲示板の前からしばらく離れず、邦治は豆タンクの吾郎の祝福を受けて照れ、剛は記念にと携帯で写メールを撮っていた。武山は俺の指導のおかげだ、と胸を張っていた。そんな彼らの元にWBCライト級チャンピオンの辰山譲が静かにやってきた。気づくと三人は正対して不動の姿勢を取った。辰山は三人と握手し、

「良くやったお前ら。勇也は上手に当てられるようになってきた。邦治はパンチのパワーがますますついてた。剛はフットワークに磨きがかかった。」

と、褒めてくれた。三人は感動した。見ていないようで、俺らの事を見守ってくれていたのか。

「そしたら今日は合格お祝いに俺が焼肉奢ったらあ、行くよな？」

三人は声を合わせて、はい！ と返事した。小磯トレーナーもやってきて、俺もちよつとは出すよ、と財布から万札を一枚出して辰山に渡した。

「みんな期待してるんやでお前らに。俺の後に続いてもらわんな」辰山の後とは、それは世界チャンピオンになることだ。まだまだ想像もつかないが、少なくとも勇也はその第一歩を踏み出したのだ。道は開かれた。いや、彼が自力で切り開いたのだ。

「これからだ……俺の未来は俺が作るぜ！」

勇也は力を込めてサンドバックを叩きはじめた。

エピソード 明日を……

遙か遠くからやってきた柔らかな風があずさの長い髪を優しくなでる。勇也とあずさは、日曜日に二人で映画を見に行き、その後波止場へとやってきたのだ。

「潮の匂いがするね。あそこにたくさんのカモメがいるよ」

あずさには、無邪気な少女の要素がたくさん残っていて、外見の大人びた風貌とのアンバランスを感じる、と勇也は思っていた。今日も黒のショートジャケットにグレーのパンツを合わせ、大人っぽい服装をしているにもかかわらず、手にはカップに入ったクッキーアイスを持っている。勇也は古着のジージャンにカーゴパンツを合わせていた。

「前から思ってたけど、あずさちゃんってお洒落だよな」

クルリとこちらを向いたあずさは舌を出して笑った。

「だって、いつも美樹ちゃんにコーディネートしてもらってるんだもの」

なるほど、と勇也は腑に落ちた。確か20歳ぐらいだったつけ。

人気のない静かな波止場に來たのはもちろん自分の思いを伝えるためだ。生まれてこの方告白なんてした事もない。恋をしたことがないとまでは言わない。だがそれは遠く遙か幼稚園時代の事だ。剛は自分に正直に行動しろ、としか言わなかった。ある時期以来相談には乗ってくれなくなった。女ぐらい自分で口説けというところか。

「あずさちゃん」

勇也は大きく息を吸った。ある意味じゃプロテストより緊張するぜ。あずさはいつもの穏やかな表情で彼の顔を見た。

「俺は、キミの事が前から好きだったんだ。俺と付き合ってくれ」

一気に言い切った。思わず目を閉じた。再び目を開けた先には、困ったような笑顔を見せる少女がいた。返事が無いので、勇也が言葉付け足した。

「ボクサーはやっぱ嫌いなのかい」あずさは首を振った。

「私、まだ勇也クンのこと何も知らないわ。これまでの生活、家族の事、好きな歌手は誰なのか、勇也クンのいいところ、わるいところ……」

「そうだね」と勇也は返した。それはそのまま彼にも当てはまった。彼は、そう言えばあずさの何を知っているのだろう。白井会長の家に住んでいて、両親は離婚したらしい事。これも噂に過ぎない。後はケーニヒスクローネのケーキが好きだと言う事。たったのこれだけなのではないか？

「勇也クンが私のことを好きだって言ってくれたのは嬉しいわ。私告白なんてされたの生まれて初めてだから」

「本当に？もてそうなんだけどな」あずさは首を傾げた。

「だから……。もうしばらくお互い友達でいたいわ。でも、私は勇也クンのことを友達として好きよ、優しいし、頼もしいし」

そう言われただけでも勇也は嬉しくなった。そして、あずさの言う事は極めて当然の事だとも思った。

「俺、口下手って言うか、俺も女の子と付き合いたりしたことないし、でも、もつと自分のことを話そうと思う。それに、もつとあずさちゃんのことを知りたい。だから、これから友達でいてくれる？」

「もちろんいいよ」

彼女は歯を見せて微笑んだ。そしておどけて右手を差し出した。

勇也も、その手を握り返した。そして、恥ずかしくなってふざけて言った。

「俺が、世界チャンピオンになったら付き合い合ってくれる？」

「いいよ。なれたらね！ ならないと付き合い合ってあげない」

とんでもない事になった、と勇也は自分の冗談を後悔した。これじゃあ何何でも世界チャンピオンになるしかないではないか。

「あのう……。日本チャンピオンじゃ駄目？」

「駄目よ、男に二言は無いでしょ」と言ってあずさは嬉しそうに笑

った。そして、手をつないだまま、

「ほら、あの可愛い遊覧船見て。側まで見に行こうよ」

と言つて、勇也を引つ張った。勇也は、とにかくこれからだな、
と思った。恋も夢も、何とかしてやるぜ。明日を望む方向へ変える
のは、俺なんだから、と自分に言い聞かせた。しかし、こと恋愛に
関しては、この子のペースに引きずられるのかな、などとも考えて
いた。

思わず見上げた真つ青な空には一文字のまっすぐな白い飛行機雲
がかかっていた。（終わり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n21111h/>

拳闘 ～汗と努力の果て

2010年11月12日16時25分発行